

Title	明治十年代前半期における慶應義塾の塾生生活(下) : 和歌山県妙寺町・森田勝之助の日記
Sub Title	The student life in Keio Gijuku in the first half of the 10's of the Meiji Era : from the diary of Katsunosuke Morita (森田勝之助)(II)
Author	松崎, 欣一(Matsuzaki, Kinichi)
Publisher	三田史学会
Publication year	1983
Jtitle	史学 (The historical science). Vol.53, No.1 (1983. 5) ,p.25- 59
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	論文
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19830500-0025

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

明治十年代前半期における

慶応義塾の塾生生活(下)

——和歌山県妙寺町・森田勝之助の日記——

松 崎 欣 一

一 はじめに

二 慶応義塾社中之約束

三 慶応義塾学業勤惰表(以上、前号)

四 森田日誌(以下、本号)

(1) 明治十二年五月～六月

(2) 明治十二年九月～十二月

(3) 明治十三年八月～九月

五 むすび

四 森田日誌

(1) 明治十二年五月～六月

すでに述べたように、森田日誌の記録期間は次の通りであった。

明治十年代前半期における慶応義塾の塾生生活(下)

① 明治十二年五月十五日～六月五日

② 明治十二年九月二十五日～十二月十日

③ 明治十三年八月一日～九月二十五日

第一及び第三の期間は寄宿舎生活、第二の期間は下宿生活であった。第十表と第十三表はこの①②の期間のうちそれぞれ一週間分そして③の期間については二週間分の生活記録を抽出し表中の字句はなるべく日誌の表現に忠実に従うようにして整理したものである。以下この表を軸として森田勝之助とその周辺の塾生達の日常を追ってみよう。

〈学業・読書〉 明治十二年五月、先きの推定に誤りがないとあればすでに勝之助の東京での生活は少くとも半年以上を経過し、塾生としても三か月になつていると考えられる。友人にも恵まれ学生々活を満喫している様子が窺える。しかし、一方では持ち前の性格と遊学の目的への自覚からであろう、日常生活への反省も

頻りである。

。午前八時半起キ十時迄何ゴトモ成サズ(五月十五日)

。午前十一時四十分頃起床、其情驚クベシ(五月十七日)

。午前七時起キ十一時マテ迂路徒然トシテ経過セリ、情ト言ンカ怠ト言ンカ自ラ裂腸ヲ為セリ(五月二十日)

。午前九時過起床ス、雑談ノ後山本義平来リ十時出室、又少間

□□テ齋藤要三郎子来リ十二時マテ諸話シ而シテ食ス、同子モ亦返ル、飯後他出セス、何分詰切り、勉強モ出来キス左レ、マツ半勉強ナリ、五時三十分ヨリ八時半過マテ奥田^(直)之助氏ノ室ニ於テ同子ト戯譚シテ、而シテ帰室シ、聞中評論新聞ヲ読シ折り岸四郎氏来ツテ強ヒテ同子ノ室ニ伴ハレ囲碁、而シテ返リ就床ス(五月二十二日)

。午前七時六分前起床ス、八時マテ雑務、九時マテگریキ出席ス、九時ヨリ十時二十分マテگریキ史預読ス、時ニ齋藤要三郎氏来リ談話ノ内岩谷氏来リ博物史ニ出席セントセシテ強ヒテ誘引セラレ、十時ヨリ温泉ニ之キ二錢五厘ヲ費シ十一時三十分頃返リ(五月二十三日)

。午前五時四分起床、諸事終リ食喫シ或此ノ日誌ヲ記シ七時ニ至ル、七時ヨリگریキ史預読少シクニシテ迫田兄来リ遂ニ譚話トナリテ子返テ後木下氏ノ室ニ^(イタル)造、談議シテ尙時間空費、八時ヨリگریキ史出席九時ヨリ読書ニカカリシニ岡村山本両名来又一時間ヲ空消ス(五月二十六日)(傍点松崎)

。三時ヨリ同四十分頃迄勉強ノ法方ヲ考エ時間ヲ確定ス(五月三十日)

これら断片的な引用からも、時間の経過を追い自らのなしたことを一つ一つ確認しながら、ともすれば友人達に囲まれて気の弛みがちな生活をふり返って自戒していることがみえよう。先きにもふれたように「日誌」とし、「明治十二年五月十五日余慶応義塾大人寮二寮第二十八番室ニ在リシ時ヨリ日誌ナリ」と認めて五月十五日からの記録が始められる事情もこうした心情を背景として理解することが出来るようである。

この時期、予備科・大人科三番に在籍する塾生としての勝之助の生活の軸となるのは、第十表にみるように午前中の「گریキ史」及び「博物史」への出席とそのため予復習であった。もつともこの表に含まれない五月十七日から二十二日には日誌の上からは授業出席のことがない。休講であったとも考えられるが、どうやら先きに引用した二十三日のようにまた二十七日のように友人達との談話に時を過してしまふこともあり、全体としてはとくに後の彼の生活と比較して勉学の密度はまだ薄いようである。ほかに「セカントリートル」を読む(五月二十九日)、「ヒイジカルジョウクラヒー」予読(六月三日、四日)、ということがあった。「算術試業欠席」(五月三十日)ということもあって具体的な記事を欠くけれども算術の科業もあつたはずである。これらの勝之助に関する科業は第一表明治九年版「社中之約束」による科業表では「第二リードル」のみ「大人科三番」で、「ヒシカル地理書」「博物史」「گریキ史」は「大人科一番」に配当されている。明治九年以降の「社中之約束」の改訂の可能性もあるが、むしろ「科業表」は一つの目安であつてその実際の運用は個々の塾生の

学力とそれに対応する指導者との関係の中でかなり弾力的に行われたのではないかと考えられる。

月末には試験がある。五月三十日の「算術試業欠席」は前夜の芝神明前の寄席吉野亭行きがたたって午前十一時起床という寝過ぎによる失敗であろうか。二十九日の記事の末尾は次のように記されている。

五時半ヨリ水野勝道子ノ室ニ之キ少間アツテ返リ、八時半ヨリ迫田子ト神明前吉野亭ニ之ク。行道人力車二人四銭、寄代一人二銭八リ、三銭菓子、八厘茶、一銭二厘火鉢敷物代右迫田払ヒ、帰途人力車代四銭、三銭余払ヒ一銭ハ迫田払フ。時十二時十分程前ナリシ。セカントリートルヲ読ミ午前一時イヌ。

なお次のような記事もあり、寄席へはしばしば出かけることがあったようである。

。岩谷、山本義平ノ両氏ト談話シ七時ヨリ同氏等ト春日寄^(寄席)ニ行キ十一時五分過ギ返塾シ就聞ス(五月十七日)
。吉武兄ト三田温泉ニ之キ四銭ヲ払ヒ返リ卅八番片山兄室ニ之キ直チニ返リ、又三人春日寄ニ之キ十時三十分返ル、其費兩兄払エリ、十一時寝(六月四日)

五月三十一日には「九時半頃谷井君室ニ於テ小試業ヲ受ケ返ル」とある。これはおそらく、いわゆる「既ニ読タル書」の理解を問う「読方試業」であろう。「谷井君」とは、和歌山県出身で明治七年四月に十五歳七か月で入社し同八年四月卒業、紀州自修学校教頭となり、同十一年慶応義塾教員となった谷井保^{ヤヰイタモツ}のことと考えら

明治十年代前半期における慶応義塾の塾生生活(下)

れる。その後明治十三年横浜正金銀行入社、十五年三菱会社航海運輸課に入り、さらに日本郵船会社神戸、大阪、名古屋支店長を歴任した人物である。⁽¹⁾月末は会計処理の日でもあった。五月三十一日、友人との貸借の整理や「月俸」・「月謝」の納入も行われている。同日の記事を全文抄出してみよう。塾内の状況が比較的良好く描写されているかと思われる。

三十一日 土。午前六時二十分起キタリ。廿七日ニ加藤子二十銭ヲ置帰リタル過分十六銭相渡シ、又嘗テ府会帰途安井ニ於テ飲食シタル割合二十一銭四厘相渡ス。四月分菜代七拾八銭八リ、五月分巻円三銭九リ、巻円八十式銭七リ、会計局本月分月俸巻円七拾銭、六月分謝巻円七十五銭右相払フ。九時半頃谷井君室ニ於テ小試業ヲ受ケ返ル。二寮二廊下ニ於テ二十三日武蔵屋ニ於払ヒタル金二十三銭受取ル(□四郎ヨリ)。十時ヨリ聖坂ヨリ迫田ト温泉ニ之ク。二銭迫田払エリ。丸久ニテ喫食ス。其費二十一銭余払之。夫ヨリ迫田ト相別カレ青山ニ之キ三時過帰リ、木下子ノ室ニ在リシトキ講堂番来リ四十三銭五リヲ払エリ。返室シ一時間空費シ四時スギヨリ九時半迄熊之助エ相送ル書面ヲ認メタリ。夫ヨリ奥田ノ室ニ之キ直チニ返リ日誌ヲ認メ終ル時二十時ノ鐘⁽²⁾声耳ニ応ス乃寝。

(六月一日の記事の上部に「桜炭一俵、石油一本、講堂番ヨリトル」とある。講堂番への支払い金に対応するものであろうか。)

正課以外ではこの期間に「近世史略」(五月三十日)を読み終えている。また友人迫田清郷の居室で「高橋於伝」の伝を読みでい

二七 (二七)

る(六月三日)。さらにいくつかの新聞・雑誌の閲読が注目される。「芳譚誌」(五月十五日)、「評論新聞」(五月二十二日、二十四日、六月一日)、「報知新聞」(五月二十三日、二十九日、六月三日)、「絵入新聞」(五月二十三日、二十九日、三十日、六月三日)の名が見えるが、これらのうち報知と絵入については次の記事にみるように、共同購読をしていたものであった。

。十一時三十分頃返り暫ラクシテ喫食シ二時マテ報知絵入両新聞ヲ読ム時松坂氏来リ、絵入新聞岩谷方エ相渡ス可キ旨ニ付同氏エ相渡ス(五月二十三日)

。十二時ヨリ報知新聞絵入新聞ヲ読ミ、三時ヨリ同伴ナク絵入新聞ヲ持チ岩谷彦子ノ所エ持之キ、須臾泉温ニ之キ二銭ヲ払テ返レリ(五月二十九日)

。十一時ヨリ何ヲシタルヲ知ラズ、正シク絵入新聞ヲ読ミシナルベシ……追田兄ノ室ニテ四時三十分迄高橋於伝ノ伝ヲ読ミ、婦テ報知新聞ヲ読ミ加藤氏エ同新聞代十一銭ヲ払フ(六月三日)

「芳譚誌」とは守田宝舟の「芳譚雑誌」(明治十一年七月創刊)のことであろう。この時期の小新聞の発展に伴って次々に刊行された続き物や戯作小説を掲載する雑誌のうちで最も売れたものである。初期には高島藍泉系統の戯作者の発表機関のようであった。投書や通信を毎号掲載していた。戯作小説雑誌は前時代の文芸の伝統を伝えながら新時代への架け橋の役目を勤めたが、文明開化の空気を吸って育って来た人々にとって表面的な因果応報・勸善懲悪主義の作品があきらめられたためか次第に没落しだし、

「芳譚雑誌」も明治十七年十一月には廃刊になっている。⁽³⁾

「評論新聞」は明治八年三月に創刊されている。西南戦争の折り西郷軍に尽力した海老原穆の創立した集思社の発行で政府の内政策をことごとく攻撃し過激な投書の掲載や西郷や前原一誠らの言動を讃えたため急進過激派と目された新聞であった。編集者名人はしばしば禁獄罰金の刑に処せられ明治九年七月の第一〇九号を限りに発行を禁止された。明治政府により発行を禁止された新聞雑誌の最初のものである。のち集思社は「中外評論」(二八号で禁止)、「文明新誌」(四二号で禁止)を発行して政府に抵抗している。勝之助の読んだものはこのすでに発行されていない「評論新聞」の既刊号をさすのであろうか。

「報知新聞」はいうまでもなく「郵便報知新聞」であろう。明治五年六月駅通頭前島密の着想により秘書の小西義敬と書物問屋泉屋太田金右衛門とに発行させたものである。駅通寮の命令で各地からニュースを集め地方記事収集に特色があった。明治七年六月栗本鋤雲の入社後慶応義塾出身者との関係が密接となり、同八年には藤田茂吉、箕浦勝人、牛場卓蔵らが入社した。さらに矢野文雄、犬養毅、尾崎行雄、加藤政之助、江口高邦などが記者団の中心となっていた。明治十一年には矢野が、また明治十四年には犬養、尾崎、牛場らが任官し以後大隈重信と報知との関係は不離のものとなり、十五年改進黨が組織されると矢野を社長としてその機関紙となった。自由民権を主張し国会急設論を主張して政府と対立した。明治十二年七月二十八日以後の「国会論」は藤田、箕浦の名を借りた福沢諭吉の論説で、明治十三、四年の国会開設

請願運動興隆の動機の一つともなったといわれる。⁽⁵⁾

「絵入新聞」とは明治八年四月創刊の「平仮名絵入新聞」が同年中に「東京平仮名絵入新聞」となり、さらに同九年春に再度改題された「東京絵入新聞」であろう。いわゆる政論新聞(大新聞)に対して勸善懲惡主義の立場に立ち平易な文章で世間の出来事を報導する小新聞の發達の中で「読売新聞」に次ぐ地位を築いたのである。⁽⁶⁾ 絵画の間に勸懲の意を寓し諧謔の外に諷刺の韻を挟む点を売り物とする新聞で落合芳幾などの木版画の挿絵を用い、また三面記事を連載記事にしたてた高島藍泉の続き物の企画で他紙に先行していた。才流麗詞葩妖艷、以て婦女の心目を怡ばしむるといふ評判であったという。⁽⁷⁾ 因みに明治九年七月より翌年六月に至る各紙發行部数をみると、東京の四大新聞では「朝野新聞」五三二万、「東京日々新聞」三二八万五千、「郵便報知新聞」二二九万三千、「東京曙新聞」が一九三万四千、これに対して小新聞三紙では「読売新聞」五四五万七千、「東京絵入新聞」二八四万九千、「仮名読新聞」一五六万一千であった。大新聞が全国的に読まれたということとを考慮すると東京市内における両派新聞の差はわずかであること、また「絵入新聞」が東京の庶民層にかなり普及していたことがわかる。⁽⁸⁾

〈余暇〉 余暇には友人との交渉が頻繁である。学校近辺に散在する下宿先を訪ね、また彼自身の表記にも「塾中徘徊」(五月二十四日)とあるように相互に居室を往来し、また先きの引用にもあるように時には参加を強要されて囲碁将棋に興じている。飲食の

明治十年代前半期における慶応義塾の塾生生活(下)

機会も多い。安井・竹屋・丸久・武蔵野・助惣(菓子屋)といった名前がみえる。いずれも学校近辺の店のようで、竹屋なる蕎麦屋へはしばしば「社中之約束」に規定された午後十時の門限を越えて出かけている。入浴も欠かさない。昼食後から夕方にかけて出かけている。日誌全体より抽出してみると、三丁目目子湯、三丁目万寿屋、四丁目男湯、吉田湯、中湯ほかに田中湯、三田温泉などの名が見える。日曜日にはやや遠出をしている。五月二十五日の日誌は次のように記されている。

午前六時十分前起床。雑事終り彼是スル内八時ニ至リ前夜約セシ如ク山本氏来リ迫田ト三人ニテ八時半頃ヨリ出門、育種場辺ヨリ人力車ニ乗シ辰ノ口勸工場ニ至ル車賃十二錢余払之、又下足預り代巻錢余出之。勸工場終り駿河町越後屋ニ造^(イタ)リ、単物一枚価三円四十三錢、紹羽織一枚五円四錢四厘、襦袢一枚価四十五錢、唐チリメン八尺大巾価九十六錢総合九円九十式錢九リ払之。物品ハ明後廿七日義塾ニ参着ノ約、時ニ迫田會計不足スルヲ以テ壹円相貸ス。買物終レハ既ニ二十二時ナリシ。直チニ出店テ日本橋ヨリ安井迄人力車ニノル。其賃十五錢、十二錢ハ山本三錢ハ迫田ニテ払エリ。安井ニテ喫食ス。會計セズ帳付ニシタリシ、夫ヨリ塾ノ下ニテ迫田ト相別レ温泉ニ之キ二錢ヲ費ス。而シテ山本宿所ニ之キ談言少ク三時三十分頃ヨリ返ッテ岡村宿所ニ之キ五時半帰塾。食後迫田氏ト相携エ岡村宿所ニ行キシカ、時ニ備前屋磨齒粉ヲ買二錢ヲ費ス。他行ナルヲ以テ吉田祥三郎子ノ宿所ニ造^(イタル)、八時二十分頃返リ竹屋エ之ク、其費六錢六厘迫田払エリ。九時投塾

同子ノ室ニ入り須臾ニシテ共ニ伴ツテ吾室ニ入談稍アツテ返ル。而シテ余直チニ就寝ス。時二十時五分過ナリキ。

辰ノ口の勸工場を経て駿河町越後屋へ夏仕度の買物に出かけたわけである。かなり高額の出金であるが、これは前々日の五月二十三日に受取った国元よりの送金三十円によつていたのであろう。

(2) 明治十二年九月と十二月

〈学業・読書〉 森田日誌第二の期間は学校より徒歩五分ほどの所に位置する三田功運町三四番地古庄方での下宿生活である。基本的な生活のパターンは第一の期間と変るところはないが、予備科・大人科二番に進級して第十一表にみるように勉学の密度もかなり高くなつてゐる。日誌をみると日曜を除く毎日午前八時より十一時の授業が基本となつており勤勉に出席をしていることがわかるが、授業に関してある程度具体的な記事のあるところは次のようになる。

。午前六時頃起。雑務ノ内八時ニ至リ同時ヨリ十一時迄十二時迄「アルゼブラ」「プラクチカル」。午後一時ヨリ五時迄ギリキ史預読シ五時ヨリ六時迄休息。六時ヨリ八時迄算術受業。八時ヨリ十二時迄算術。十二時就床ス。(十月一日)

。午前六時醒ム。此日夙起ヲ以テ自ラ期スト雖モ前宵床上眠リ成ラズ午前頃ニ至テ始メテ夢成ルヲ以テ如斯克晩ク成リシナリ。室内掃除シ朝食終リ七時ニ至リ読英国史。暫クアツテ学校ニ造^(イタ)レハ七時三十分ノ鐘声鏘々タリ。直チニ山本義平氏ノ室ニ入り報知新聞ヲ読ム。八時ヨリ十一マテ業ヲ受ケ乃チ返

ル。本日「コル子^(ネ)ルジョウグラヒイ」読卒シ之ニ代ユルニ「ポリチカルエコナヲミー」ヲ以テセリ。十二時ヨリ勉強モセズ。十二時ヨリ経済書ヲ預読シ卒リ今晨ヨリノ日誌ヲ書シ卒リ英国史ヲ読ミ四時四十分ニ及ブ。(十月十六日)

。新聞ヲ読ミ八時ニ至ル。本日教師中村英吉君欠席シタリ。別ニ何事モ為サス九時^(オヨ)ニ暨フ。九時ヨリ十一時迄受教。(十月二十一日)

。七時過出寓。三田三丁目ニ於テ木履ノ齒ヲ新替シ大ニ時間ヲ取り義塾ニ造レハ既ニ数学課ノ最中ナリキ。十一時迄受業。(十一月十一日)

。午前六時出床シ諸務後朝食終ルヤ否ヤ義塾ニ至リシニ八時五分前ナリ。拾時迄受業十一時ノ英国史ノ課ハ教員長岡氏来ラズ故ニ休業ナリ。(十一月十九日)

。午前七時出床間モナク朝食シ而義塾ニ造リ三課受業十一時帰ル。(十二月十日)

要するに午前八時より十一時迄に一時間ないし二時間単位の授業が行われていることがわかる。十月一日のように夕方の授業というのはこれ限りで他に事例はない。

教員中村英吉は福沢諭吉の従弟にあたる。福沢が一時養子となつたことのある叔父中村術平の実子である。明治三年十二月に福沢が中津より母を伴つて上京した折りに同道⁽¹⁰⁾しすぐに入塾していることは「入社帳」にも記録されている。明治十二年現在で二十歳である。担当科目は不明である。また「道聴途説」の記録⁽¹¹⁾によればこの頃塾内福沢邸の離れ座敷に岡本貞然と共に同居してい

たようである。明治十八年頃には下関商法学校教員となつてい⁽¹²⁾る。なお明治二十三年版塾員名簿によれば同一人物と思われるが中村栄吉の名で大坂尋常師範学校在職と記されている。英国史担当の教員長岡氏とは長岡謙二郎と考えられる。入社帳によれば山城国出身で明治三年五月の入社である。明治七年九月再来学、八年八月本科二等在籍の記録がある。明治十二年には先きにも記したように法律学校にも教員のまま学生として在籍している。この年二十七歳である。また「道聴途説」の明治十三年五月二十日の記事として、⁽¹³⁾

長岡謙二郎君ハ未曾聞ノ奮発ヲ以テ塾中某子トシーソーノ戯ヲ為シタルニ固ヨリ不慣ノコトナレバ忽チ墜躓シ幸ニ怪我ハナカナリシガ思ハズ心臓ノ辺ヲ押ヘタリ其驚駭想フ可シ

というエピソードを残した人物である。学科目としては第一期間に引続いて十月初めにかけて「ギリキ史」「ジョウグラフィ」の名がみえるが、新たに「アルゼブラ」「プラクチカル」「算術」「数学」の名が登場し十月下旬まで続く。第一表の科業表によれば「アルゼブラ」は本科第四等に配当されている「ロビンソン・エレメンタリーアルゼブラ」であり「プラクチカル」は第五等の「ロビンソン・プラクチカルアリスメチック」であろうか。いずれにせよ授業のほかにも先きの引用の事例のほか、夕食前後からしばしば深夜に及んで数学について自学自習に努めている様子が見え、この期間に数学の勉強がかなり集中して行われていることがわかる。さらに十月十六日より「経済書・ポリチカルエコナミー」の講読が始まり当期末に及んでいる。十二月には「第三リ

明治十年代前半期における慶応義塾の塾生生活(下)

ードル」の勉強が始まっている。科業表によれば予備科の童子科、大人科いずれも第三番に配当されている「キルソン・インテルメヂエート第三リードル」であろうか。十二月二日の記録には次のように記されている。

中年寮野田精一郎子室ニ入ル時ニ三好義直子第三リードルノ組ハ三時ヨリ始ムト。余本月ヨリ英人キーリング氏の語学ニ出ツル故ナリ。余聞テ乃チ還ル。時ニ午後一時ナリ。夫カラ二時半頃迄経済書復読シ而シテ義塾ニ往キ彼是スル内三時ニ及フ。同時ヨリ四時迄正則受業、此業ハ客日ニ在ルナリ。

「正則授業」というのは英人について発音を正すことに重きを置く授業の意であろう。明治六年に学科課程改正のことがあり、若年時から十分に時間をとって横文だけでなく和文をあわせ段階を追って教育を行う正則課程と晩学者のために当座の必要を充す速成教育を行う変則課程を設置したという場合の意義と異なり、読解に重きをおく変則と発音を重視する正則という世間一般の用法に従ったものであろう。この前後の日誌には「習英字」という記事もよく見られ英語の時間をとっていることがわかる。なお第二期の日誌の記事は十二月十日で終了し、その間この授業への出席の記録があるのはこの日と四日のみで「客日」の意義については不明である。キーリングについては次のような事件が伝えられている。「道聴途説」の中の明治十二年四月十八日の記事「キーリング奇談」なるものである。キーリングの飲酒による塾外での愚行の状況とそれを学生が「酒ヲ飲ムモ酒ニ飲マルコトナカレ」として授業中に詰問追求したという他に記された塾内諸雑報にくら

べてかなり詳しく記録されているものである。そしてその三日後には

四月廿一日快晴

昨日ハ日曜ニ付文明論ノ講義ヲ本日ニ延引。本塾文庫ノ取調
八田小雲氏引受ニテ此節既ニ整頓不日貸渡ノ規則ヲ設ケ社中
自由ニ借用スルヲ得ベシ其規則ノ調ハ小幡篤次郎加藤政之助
引受ナリ

。塾生の試業昨日マテニ終リ本日ハ席替
という記事に引続いて、

。ミストルキーリング飲酒ノ話アリ飲酒ハ固ヨリ宜シカラヌ
事ナレドモ之ガ為メ其人を愚弄スルハ又甚タ宜シカラズ詰リ
此方ハ彼ノ人ニ英ノ語音ヲ学フノミ其他ニ關係ナキコトナレ
バ平生ノ品行如何ハ之ヲ度外視シテ可ナリ且又キーリングモ
決シテ悪人ニ非ス奸物ニ非ス飲酒ノ僻ハ之ヲ其人ノ病トシテ
看ル可キノミ病氣ナレハ其病人ヲ憐ムコソ学者士君子ノ本意
ナレ諭吉ノ考スノ如シ諸君如何¹⁴

と記されている。正則授業の意義も明きらかであるがまた福沢を
中心とした慶応義塾の教育がどのように行われていたかを窺いう
る興味深いエピソードとなっている。

試業については日試に次の記事がある。

。午前七時十分過醒ム、乃チ喫飯スルヤ否ヤ造塾。此日読書
少。試業ニシテ九時頃試業ヲ受ケ終リ十二時迄松本重三郎子
ガ室ニ於テ譚アツテ遂ニ帰ルヤ否ヤ岡村来リ囲碁ノ中、野田
精一郎氏訪フアツテ遂ニ五時マテ囲碁^(マ)ニテ時ヲ過シタリ。

(十月十日)

。午前六時頃起キタリ。本日ハ算術小試業ナルヲ以テ饌畢リ直
チニ義塾ニ至ル。九時ヨリ十時迄出席(十一月十四日)

。午前六時半起キタリ。諸事終リ饌ヲ待チ兼子^(ネ)乃喫スルヤ否ヤ
義塾ニ至リ吉村氏室ニ居テ談話シタリ。十時頃読方小試業済
テ乃塾ヲ出テ迫田氏寓ニ往キ十二時迄遊談輒チ還リ食ス。

(十一月十五日)

具体的な内容はわからないが日誌の第一の期間では月末実施であ
った試業がここでは中旬に変わっている。

新聞雑誌その他の諸書についてみよう。まず「報知新聞」が引
続いて読まれている。やはり共同購読であった。それは日誌の十
月十四日の記事に「山本義平氏ノ室ニ入り、報知新聞仲間入ヲ書
入レ後チ談話シ八時ニ至ル」とあり、また日誌末尾に記録された
金銭出納記に十一月一日の出銭として「四銭二厘五毛 報知新聞
一ヶ月二分ノ一代山本氏エ渡ス」、十二月二日の出銭りして「十銭
十二月分報知新聞代山本義平氏エ渡ス」とあることなどによって
わかる。この期間に新たに読まれ出しているのは「東京日々新
聞」である。十一月十二日の記事に「山本氏室ニ入り報知新聞ヲ
取りニ行キ溝部氏室ニ入り談シ序ニ新聞ノ事ヲ謂シニ相談忽チ整
ヒ翌十三日ヨリ東京日々新聞ヲ買求スル事ニ極リシ乃還居」とあ
る。十二月三日の出銭記録には「五銭四厘 十一月十日ヨリ日々
新聞代笹林静介氏エ渡ス」とある。「日々新聞」は明治五年三月
創刊、同七年には福地源一郎が入社して社説欄を創設し太政官記
事御用の新聞となった。漸進主義をとり多くの場合政府の政策を

支持して御用新聞と呼ばれたが新聞一般の地位を高めるのに貢献したといわれる。⁽¹⁵⁾他に「物価新報」「兵事新聞」の名がみえる。「物価新報」とはどのような新聞であったのか不明である。

。折柄蜂須賀子来り物価新聞ヲ持来レリ(十一月七日)

。追田子栖屋ニ入り物価新報ヲ渡シ煙草入レヲ持チ乃義塾蜂須賀子室ニ入休スル(十一月八日)

。蜂須賀氏室ニ之キ漸クシテ物価新旧更代シ山本義平氏室ニ入り報知新故換易シテ三田通りヨリ返ル(十一月二十五日)

などという記事があつて「報知新聞」などは別グループで購読していたようである。「兵事新聞」についても未詳である。日誌

では十一月四日にその名がみえ、次いで十二月九日に「三田二丁目菓種屋ニ往キ兵事新聞エ断リ書ヲ送り」とあり、「金銭出納記」

に「八日 五厘 端書一枚送兵事新聞□」とあるのみである。また「金銭出納記」に十一月二十日の出金として「五銭 円々珍聞⁽¹⁶⁾

代」とある。明治十年に創刊され政治諷刺によって評判となった

「団々珍聞であると考えられる。⁽¹⁶⁾雑誌については十月十九日に「近事評論」を購入していること、十二月一日に「嚶鳴雑誌」を

読んでいることがある。「近事評論」は明治九年六月創刊の週刊雑誌で十六年五月に廃刊となった。「評論新聞」のあとを受けて鋭い

政治評論を続け明治十年代の自由主義的左翼の機関紙として盛んだったものである。⁽¹⁷⁾「嚶鳴雑誌」は明治十二年創刊、十六年五月に

「東京輿論新誌」に合併された。沼間守一を中心とした嚶鳴社の機関誌で十六年三月以後は改進黨の機関誌とみてよいものである。

十年代前半の最も有力な政論雑誌であった。⁽¹⁸⁾その他の読書につい

明治十年代前半期における慶応義塾の塾生生活(下)

ては次の記事がある。

。喫食シ而テ男湯ニ往キ還レハ一時ナリキ。三時三十分迄読書シ夫ヨリ飲倉ニ之キ「ライフヲフワシントン」ヲ買ヒ三田ニ還リ煙管ヲ買ヒ夫ヨリ追田氏居ヲ訪ヒ同子食終リ伴ヒ返ル。(十一月十一日)

。後桃園天皇百年祭ニ休業ナリ。午前十一時三十分頃出床セリ。輒チ諸事ヲ終リ種々片付ヲ為シ午後二時ニ至ル。此日終日風雨ナリシニ此時少シク小降ナリシ故茶ヲ買ヒニ往キ還リ一休シ三田四丁目男湯ニ往キ帰途讚岐屋ニテ人情本ヲ借り還⁽¹⁹⁾リ良久シテ夕食を喰ヒ直チニ床ニ入十一時人情本ヲ読而シ遂ニ寝ス。(十二月六日)

「金銭出納記」の記録によれば「ウワシントン一代記」出金一円五十銭であった。貸本屋への支払いとしては九月二十八日に二十七銭、十二月三十日に十銭の記録がある。

〈演説〉 次にすでに五月二十四日の日誌に「演説」を聞くという記録があるが、この期間の日誌ではさらに演説に関する記事がかなり多くみられる。やや繁雑ではあるがそれらを抄出してみよう。

。十一時食事畢ルヤ否岡村幸作来リ午後一時四十分頃迄無益ノ談ヲ為シ同時ヨリ演説館ニ至リ同五時帰寓ス(九月二十七日) (上)

。十一時食シ三田二丁目ノ斬髮屋ニ入り一時マテ移リ岡村宿所ニ之キ直チニ出テ義塾演舌館ニ至リ五時ヨリ帰寓ス(十月

十一日(土)

。十二時過ヨリ校ニ至リ奥田直之助ノ室ニ入りシ所ロ子ハ将ニ外出センスル折ナリシ。乃チ演説入社ノ手續ヲ聞キ坂井次永子ヲ訪ヒ演説入社ヲ申シ入レタリキ。社名ハ共同社ト名ケリ。(社名抹消、頭注訂正して精干社となっている。松崎注)直チニ蜂須賀子ヲ訪ヒ談話時アツテ演説入金一錢ヲ借り一時ヨリ演舌館ニ造リ。三時ニ演説ヲ終フ。余ハ演説不當番ナリシ。暫ラク社議アツテ三時四十分頃ニ解散シ余復卒業生討論ヲ聴キ四時半頃ヨリ還リ餐終リ新聞ヲ読ミナドシ八時ヨリ九時迄英国史預読シ一ピエイジ卒リ夫ヨリ再ヒ新聞ヲ読ミ殆ンド十一時ニ暨フ。(十月十八日(土))

。夫レヨリ還ルヤ否ヤ昼餐シタリ。刻頃ニシテ塾ニ赴キ坂井次永氏ニ面シ演説者投票ヲ渡シ山本室ニ入り直チニ出テ三好義直氏室ニ入り談。頃刻ニシテ吾報知新聞ヲ読ミ終リ出テ同新聞ヲ奥田直之助氏室ニ置キ須賀氏室ニテ談頃刻直チニ復ラントセシニ山本義平子ニ逢ヒ又話暫ラクシテ出。福沢先生ニ面晤セントセシカ来人アルヲ以テ面セス還ル時ニ二時五十分ナリシ。夫ヨリ五時迄英国史預読シ五時ヨリ夕餐入湯散步シ返リ七時ヨリ十一時マテ軍武論ニ時ヲ移シ而シテ眠ル。(十月二十一日(火))頭注・此演説者ハ来ル廿六日大宮エ出張スルモノナリ)

。午食シ休憩フ後、義塾中年寮三好義直氏室ニ入り談話シ此時時友市太郎子ヨリ詩礎階梯ヲ借り演舌館ニ往ケハ討論將ニ創マラントセシカハ即チ一錢ヲ出シ十三番場ニ即ク。討論終リ

社議アツテ幾ント四時過ニ及ヒ返リ、八百吉ヨリ此方ニ及ヒ不図時友氏ヨリ借り受ケシ階梯ヲ万来舎エ忘レ置キシヲ又再ヒ復リ階梯ヲ持チ和田柔術場ニ衆童ノ戯ヲ見テ五時頃ニ至リ帰寓。(十月二十四日(金))

。二時ヨリスピーチハウスニ往キ五時前迄聴説シ夫ヨリ帰寓。

(十月二十五日(土))

。義塾ニ行キ坂井次平子ヲ尋子演説一日開クヤ否ヤ問ヒ乃蜂須賀子室ニ入り(十月三十日)

。十二時過ヨリ塾ニ到ル一時迄誰ノ室ニ居シカ忘レタリ。壹時ヨリ三時迄演説。此日余ハ勇武精神論ヲ述タリ。衆散シ余中

年寮三好義直氏室ニテ譚話シテ及五時。(十一月一日(土))

。午食シ乃チ迫田子寓ニ之キ午後一時迄談話シ乃チ出テ万来舎ニ到リ討論出席シ三時閉会ス。(十一月七日(金))

。義塾ニ到リ松本氏室ニ入り直チニ出テ山本義平氏室ニ入り一時迄報知新聞ヲ読ミ乃同時ヨリ三時迄精干社演説出席閉会シ即還ル。(十一月二十一日(金))

。一時ヨリ演説館ニ至リ精干社エ一錢出金シ本日討論会ヲ開ケリ。発論者ハ坂井次永氏ニシテ方今我国府県会代議人撰挙法其当ヲ得スト云ヘリ。余素トヨリ同意ナレ氏賛成者多ク抗者ナキヲ以テ喋々反対シタリキ。而シテ決ヲ取りシニ余ノ同論多教ナリキ。三時閉会而シテ余直チニ渡辺氏ヲ尋子シニ不在ナリ。乃チ塾ヲ出テ岡村幸作氏寓ヲ尋シニ不在ト答フ。又迫田清郷氏ヲ訪ヒシニ在樓ナリ。乃面シ一休ノ処エ蜂須賀次郎山本義平氏来リ暫ラクシテ両氏ト別レテ余帰寓。乃晚餐シ煙

一喫出寓時ニ少雨降レリ。走テ義塾ニ至リ幹事渡辺久馬八氏ヲ尋子^(ネ)シニ不在。而シテ水野勝道氏室ニ入り直チニ出テ演説館ニ入り自立社ノ演説ヲ一寸聞テ乃出テ岸四郎氏室ニ入り暫ラクシテ復ル。(十一月二十九(土))

。直チニ義塾ニ到ラントテ八百吉角迄行キントキ精干社員某同社ノ廻章ヲ持チ来リ余ニ渡セリ。此事ハ余昨宵坂井次永氏ヨリ伝聞セシ故塾ニ往カントセシナリ。即チ某ト伴ヒ塾ノ十四番講堂ニ至レハ皆集会セリ。喋々弁ヲ費シ竟ニ午後一時三十分ヨリ精干社員日影町竹谷ナル写真屋ニ行タリ。此日朝ヨリ実ニ好天気ナリシニ二時前ヨリ俄カニ曇リ竹谷ニ掛ケ合シニトテモウツラジ然シ経験ノ為ウツサント乃写セシニ紙写^(ママ)シニナラスト言エリ。廻チ翌日ヲ期シ而テ復途山内徳川廟ヲ見テ而テ順路還リ(略)(十一月五日(金))

。折柄豊嶋某氏来リ曰ク精干社員集会セリ今ヨリ写真ヲ横シニ行カント。輒チ共ナハレテ日影町竹谷ニ之キ三時ニ及ヒ横シ終リ而シテ還ル。(十二月九日(火))

福沢諭吉が近代社会における言論活動の意義を認識し塾内においてそのための教育・実践活動ひいては広い意味での政治教育を重視していたことはよく知られている。明治七年六月三日田演説会発会、同八年五月演説館開館、同九年十一月万来舎(演説館に接続した集会所。塾内の社交クラブ、学生クラブの役割を果たした。)の建設のことがあり、学生の演説討論の活動も盛んに行われていた。それらの学生の団体については「協議社」「猶興社」「自由社」などの存在がすでに知られている。「協議社」は福沢諭吉の勧誘に

明治十年代前半期における慶応義塾の塾生生活(下)

より演説、文章等の奨励のため生れたもので明治九年末までにはできていたものと考えられる。主要会員は波多野承五郎、本山彦一、加藤政之助、尾崎行雄、桐原捨三、松木直巳、古渡資秀、吉良享らであった。「猶興社」はこれよりやや遅れて結成されている。「自由社」は永井好信日記の明治十二年七月十一日にその名が見えるものである。「協議社」の社員は演説の練磨と文筆活動を盛んに行い「民間雑誌」「郵便報知」などに投稿していたが、明治十二年になると本山彦一が兵庫県庁に出仕して東京を去り、波多野承五郎が病気になるなどのことがあって活動は振るわなくなったようである。「猶興社」の主要社員は犬養毅、高島小金次、林欽亮(のち伊藤欽亮)、永井好信らであった。「協議社」と「猶興社」のメンバーは塾内において対照的存在だったようで、前者の連中は絹布を着、白足袋を穿き、才人を以て自任するハイカラ揃いで演説を試み文章を競って気取っていたのに対し、後者の方は漢学仕込み、敝衣短袴の蛮から揃いで酒の飲み合い蕎麦の食い競べをやる風であったという。犬養の如きは「協議社」の連中をみるとその宿へ押しかけて行つては「自称人材、一つ貴公の大文章を見せろ」という調子で、その文章の誤まりを指摘し悪口を叩いて快としていたという。⁽¹⁹⁾明治十三年春からは「会議講習会(議事演習会)」が塾内に設けられ擬国会が行われるようになった。この頃「協議社」の中心社員であったものは卒業しており福沢諭吉は教員門野幾之進、鎌田栄吉のほか「猶興社」の社員を中心として来たるべき国会開設の準備として議事討論の練習を起して塾生の関心を高めようとしたのである。十三年三月に開催された第一回の

議事講習では議長に藤野善蔵、政府委員に犬養毅、林欽亮、門野幾之進、高島小金次、鎌田栄吉などがあたってゐる。

以上は「慶応義塾百年史」に明きらかにされたところであるが、⁽²⁰⁾この他に「平賀敏君伝」によれば明治十二年ころに「経世社」という学生の演説団体があった。メンバーは平賀敏、村田豊、高橋正信、矢田績、北川礼弼、渡辺修、浅岡満俊、井出徳太郎、渋江保、芹沢徳一、枝元長辰、坂井次永らであった。同書の編者土屋元作氏は「明治十二年は恰も福沢先生が報知新聞紙上に箕浦勝人氏らの名を以て国会開設論を公にし、日本国中に国会運動の勃発した時であるから左なきだに演説好きの塾生等には恰も焚火に油を注いだやうな有様であったことと思われる」と説明されている⁽²¹⁾が、先きの引用中に見えるように森田日誌によつてさらに森田自身の入会した「精干社」、また「自立社」、そして明治十三年八月二十五日の記録によつて「有終社」の存在を知ることが出来る。また日誌に「精干社」が初めて見えるところで本来は「共同社」と記されていたわけで「共同社」なるものが他に存在していた可能性も考えられる。「精干社」の演説討論会は毎週金曜あるいは土曜が定例であつたようである。もっとも十一月二十九日の例にみるように「自立社」の会合も同じ演説館で「精干社」に続いて開催されており、各団体が週末に競つて会合をもつていたのである。森田自身も十一月一日に「勇武精神論」なる演説をしている。日誌によれば「七時ヨリ十一時マテ軍武論ニ時ヲ移シ而シテ眠ル(十月二十一日)」、「時ニ八時頃ト覺タリ夫ヨリ武勇論ヲ考エ不知眠リ居シニ目覺メ夜具ヲ出テ着服フ儘遂ニ夜ヲ徹シタリ(十月二

十四日)」、「直チニ床ニ入り尚武論ヲ読シ十一時過眠ル(十月二十六日)」などとあり準備にかなりの時間を費していることがわかる。また九月末からこの頃にかけて「文章を作る」「文綴」といった記録が散見するものこのことに関わりがあるかと思われる。演説の内容がいかなるものであつたのか不明であるが、尾崎行雄がおそらくこの年に芝で行われた海軍士官の会合で国家の盛衰興亡は尚武の氣象の有無によつて別れるという「尚武論」なる演説をして評判になつた⁽²²⁾といひ何等かの関係が考えられるかもしれない。森田の「精干社」への入社は坂井次永を通じてであつた。またおそらく奥田直之助、蜂須賀次郎も社員であつた。と考えられる。三名はいずれも出身は士族で明治十二年二期の時点で蜂須賀、坂井は十九歳、奥田は二十歳でそろつて本科三等に位置している。蜂須賀は名東県(阿波)名東郡出身で小室信夫の紹介により明治八年七月に入塾している。坂井は青森県田名部町出身で明治十一年一月に入塾、奥田は鹿児島県日置郡串木野出身で同じく十一年六月に入塾している人物で、この時十七歳の予備科生としての森田にとつていずれも先輩となるわけである。なお「會議講習会」の参加者で議長、幹事などをつとめた人物のうち森田日誌にその名が見えて森田との交渉のあつたことが判明するのは、奥田直之助、高島鉦吉、池田宇三、三好義直、野田精一郎、北川礼弼である。また「経世社」のメンバーでは北川礼弼、坂井次永である。「猶興社」では永井好信の名が見える。十月二十一日の大宮へ出張する演説者の投票というのは、この頃埼玉県下でさかんであつた加藤政之助を中心とする慶応関係者の演説活動と関係あるもの

であろう。明治十二年に限ってみても四月六日には竹井澹如らの「共同社」の主催で熊谷において加藤ら慶応関係者による演説会が開かれている。六月十五日には蔵において尾崎行雄、加藤らの演説会が開催され、七月にも慶応関係の弁士が参加した演説会が開かれているのである。⁽²³⁾ こうして塾内外における言論活動の高まりの中に多少なりとも森田勝之助も関わりをもったのであるが、また当時進行していた交詢社の設立準備の過程に接する機会をもっていたことも注意してよいだろう。

奥田直之助氏室ニ入り茶菓ヲ喫シ譚話ノ時座側ニ新聞紙若キアリ採テ之ヲ見レハ交詢社ニ員性名廣告ナリ。乃其人ヲ見ルニ官員書生等ナリ。而シテ同社ニ則テ同氏ヨリ借り受而シテ渡辺ヲ尋子^(ネ)シニ亦不在ナリ乃チ復ル。時ニ七時ナリ。十時迄ドーカコーカ読書シ先英国史文ケ預見済タリ。十時ヨリ十一時迄交詢社ニ則テ見終リ昨日ヨリノ日誌ヲ書シ而シテ夫ヨリ就床シ十二時ニ眠リ成ル。(十一月二十七日)

森田の帰郷後、郷里に結成された「自助社」の明治十四年の仮規則第一条が「本社ハ有志社相集リ、文学ヲ研究シ、世務ヲ諮詢シ、知識ヲ換発シ、情交ヲ厚クスルヲ以テ目的トス⁽²⁴⁾」とあって、交詢社々則に通ずるのも森田のこうした体験が生かされていると見てよいだろう。

〈余暇〉 余暇の過し方については基本的には第一の期間と同様である。友人の寄宿先を訪ねまた友人たちとあちこちへ出かけている。寄席見物、飲食、入浴などのほか時折芝神明前の揚弓店へ

明治十年代前半期における慶応義塾の塾生生活(下)

出かけたまた玉突きに興じ、あるいは下宿近くの地藏縁日にくり出している。またこの時期には「散歩」という表現での外出の記録も多く出てくる。第一の期間にあらわれたものの他にアナゴ屋(三田三丁目、飲酒)、八百吉(食事)、鈴木屋(三田三丁目、菓子)などの店の名がみえる。「京橋近辺迄散歩シコンバル^(バ)ヲ徘徊シ帰途鳥森ニ於テ一杯ヲ傾ケ(十一月三日)」といった記事もある。「西洋小間物店」の今井(三田二丁目)で「ハット」「ピエン(ピン)」「西洋風手帳」を買うという記録もある。静海堂(三田三丁目)は書籍・文具を扱いたまた塾生を下宿させていた。書籍の購入ではほかに日影町、飯倉へ出かけている。讃岐屋は貸本屋でありかなり利用していたようである。これらをあわせて日常的な行動の範囲はおよそ三田、芝、飯倉、新橋、京橋、日本橋であるがさらに休日などの行動も含めていくつかの事例を次に見よう。

・午前六時頃起タリ。姑ラクシテ晨食終リ乃蜂須賀子ノ羽織ヲ持チ蜂須賀子室ヲ尋^(ママ)エシニ外出シナリシヲ以テ羽織ヲ置キ山本子室ニ入ル。乃団子坂行キヲ約シ出テ山本子室ニ入ル。乃塾ヲ出テ岡村子寓ニ往キ出行ヲ促シ又迫田子寓ニ往キ休息ノ内蜂須賀子山本子来リ姑クアツテ四人伴ヒ岡村子ヲ促シ五人ニテ団子坂ヲ向テ発行シタリ。至レハ乃十二時ナリキ処々ノ菊人形ヲ見テ染井ヲ指テ行キタリキ。其道ニ於鰻屋ニテ午餐シタリ。染井ハ未タ人形ナシ。又巢鴨ニ行キ或ル植木屋ニ入菊花ヲ見テ休息シ出テ上野ヲ指テ行ケリ漸クニシテ不忍池ニ着シタリ。夫ヨリ順路三田ニ還ル。途中ニテ各相失シ蓋シ迫田子ハ日本橋辺ヨリ車ニテ返リタリ。余七時頃漸ク迫田子寓

ニ着ス。此日凡テ六里余行歩セリ。休スル時アツテ夫ヨリ二人ニテ男湯ニ往タリ。其代迫田子払エリ。地藏辻ニ至リ蕎麦屋ニ入り論子(ママ)一喫乃チ返ル。余從容喫終リ徐々トシテ返リ寢ス。八時過ナリキ。(十一月二日(日))

。午後五時ヨリ芝山内新道ヲ通り日影町通りニ出テ新橋ヨリ京橋ニ至リ同橋南側東エ入り築地ニ之キ十五国立銀行角ノ石橋ヲ渡リ夫ヨリ直路西行シ飯倉ニ出テ直路返ル時ニ七時ナリキ。夫ヨリ英国史ヲ読ミ終リ經濟書ヲヨミカケ中止シ日誌ヲ書シ終リタルハ午後十時ノ義塾ノ鐘声耳ニ徹ス。夫ヨリ英字ヲ習ヒ午後十一時ニ及ビ床ニ入ル。(十一月六日(木))

。午前五時起キ結束シ単物一枚紹羽織一枚ヲ持テ之キ天満屋庄兵方エ預ケ三円ヲ借りタリ。迫田子栖屋ニ入り物価新報ヲ渡シ煙草入レヲ持チ乃義塾蜂須賀子室ニ入休スル。暫ラクシテ七時三十分頃義塾ヲ出立シタリ。夫ヨリ順路千葉県行徳ニ往キタリ。同所ニ於テ午餐餐シ即チ出テ八幡ニ往キ不知八幡森林(鴉)巡見シ紅ノ台ニ登リ直チニ市川駅ニ至ル。駅ハ江戸川ニ浴フテ戸数五百戸許リナリ。乃江戸川ヲ渡ル。渡レハ乃東京府下ニシテ日本橋ヲ距ル殆ト四里ナリ。夫ヨリ直路東京ヲ指テ行一里許斜陽己ニ西ニ没シ天暗黒足痛ミ歩行シ勝エス(ママ)。本所新懋社近辺ヨリ人力車ニ乗シ芝神明ニ着シ夫ヨリ徐々歩テ寓ニ着スルヤ夕飯ヲ食セス亦浴湯ニセス直チニ寢ス九時ナリキ。(十一月八日(土))

。十二時三十分頃迄談話シ夫ヨリ義塾奥田氏室ニ入リシニ飛鳥山ニ行ント諺シ故奥田松尾狩野枝元蜂須賀假井ノ六氏ト相伴

ヒ処々徘徊シ十時過帰寓。乃チ寢。(十一月二十二日(日))
第一の事例は団子坂↓染井↓巢鴨↓上野不忍池というコースで菊人形の見物であった。この日の出銭記録は煙草代六銭、蕎麦代九銭(二人分)である。同方向でのちには王子の飛鳥山へ出かけている。また行徳から市川国府台へと出かけており昼食代十二銭、八幡での梨子代六銭四厘(八個分)、江戸川渡し代一銭(一人分)などの出銭記録がある。日誌第一の期間に比べてその行動半径の拡大が著しい点を確認することが出来るであろう。

ところで十一月三十日の記事を見ると「一休シテ昼食シ夫ヨリ三日程前ヨリノ日誌ヲ書シ終リ而シテ本月金銭出納ヲ調査シテ午後三時ニ及フ。」とある。その結果は「金銭出納記」によれば次のようなものであった。すなわち下宿への払い三円八十銭(内三円五十銭が賄代で、客二人十銭、炭十八銭、下駄直し二銭を含む)を含んで十一月中の出金計十八円四十五銭七厘五毛である。それに対して入金は十九円九十六銭五毛あり、内訳は先月残金四十六銭五毛、質屋借入れ四円五十銭、出版社より受取金十五円であった。「出版社」とは日誌にも「義塾出版社ニ往キ藤本氏ヲ尋子シニ他外ナルカ室ニハアラス(十一月十九日)」「出版社ニ行キ藤本ヨリ十五円受取り(二十日)」とあることに対応するものであるが、明治五年より十五年までの約十年間塾内に設けられた「慶応義塾出版局」のことである。福沢の著訳書の出版をはじめとしてその活動は一時極めて盛大でありその事業収入が塾財政を支えたが、また学資不十分な塾生に出版事務を手伝わせ便宜を与えたり将来実業界に進むべき卒業生の商業実習として入社をすすめたとい

(25) う。森田の場合も十月二十九日の記録にも出版社よりとして七円の受領をしておりそうした事例の一つとなるわけである。

〈勉学への不安〉 こうして相当に多忙なしかも充実した日々が送られているのだが、一方では例によって勉学の捗りを心配する記述があちこちに見られる。

。八時ヨリ十一時受業。十一時ヨリ帰寓。新聞ヲ読ミ喫食シ十二時ニ至ル。同時ヨリ午後一時マテ談話時ヲ移シ同時ヨリ漸ク読書ヲ始メシニ野田精一郎氏来リ談論ス。蓋シ無益ニ非ル可シ。同三時氏帰ル。同時ヨリ五時マテ読書。五時ヨリ喰畢リ入湯シ返ルヤ否蜂須賀次郎岡村幸作両氏来リ引続キ迫田清郷氏来。又松本重三郎氏石川彦太氏ヲ携エ来ル。其迷惑語言ニ堪エス。九時皆返リ惟リ。迫田清郷一泊ヲ講フ。須叟蕎麦ヲ喰シ為メ地藏辻。喫畢リ返リ直チニ寝十一時頃ナリシ。

九月二十六日、三田功運町に始まった下宿生活最初の日の記録である。友人達の来訪に勉学の時間をさかれせかくの新生活に不安を来しているようである。以後日々の詳細な記録が続く中で時折そうした不安感の一端をみる記述がみられる。

。此日ハ勉強トモ言難シ然リト雖氏決テ怠ニ非ラス(十月十五日)
。余二時ヨリ還ル。帰り何事モ成サス。只前途ヲ考エ自規ヲシテ一層厳ナラシメタリキ。夫レニ付幾ント五時ニ至ル(十月十九日)

。中年局森岡守衛子室ニ入り三時頃迄無益ニ時ヲ移シ夫ヨリ相
明治十年代前半期における慶応義塾の塾生生活(下)

伴ヒ男湯ニ浴ス。其費同子払ヒタリ。乃携エ帰り談話ノ内五時ニ至ル。夫レニモカモワス困碁ヲ始メ六時頃ニ至リ共ニ晩食シ復困碁シ而テ子帰リタリ。跡ニテ自身ノ決心セザルヲ憂ヒ漸ク八時(既)ニ決心シタリ。乃日誌ヲ書シ八時半頃ニ及タリ。夫ヨリ英国史ヲ読ミカケンガ直チニ廢シ翌晨夙起セント自期シ九時ヨリ就床ス。(十月二十八日)

また次のような記事もみられる

。男湯ニ之キ五時前還リ食後休スル。暫ク月ヲ見ナカラ種々の想像胸間ニ浮ヒ遂ニ□(抹消)ヲ起シ□□(抹消)ニ及ヘリ。夫ヨリ元氣恢復シ遂ニ六時ヨリ十時迄英国史預読シ緩リ經濟書ヲ聊カ読テ而シテ今朝ヨリノ日誌ヲ書シ卒リ習英字シテ午後十一時ニ及ビ乃チ眠ル。(十月三十日)

。五時食シ京橋辺迄散歩シ還ル乃菓子買ヒ来ル。蓋シ此日モ亦例ノ考エ胸ニ浮シ故勉強セサルナリ。八時ヨリ寝ス。(十月三十一日)

。三時比迄読書スト雖氏心意爰ニアラサレバ何ノ益モナシ。(中略)時ニ午後七時ナリ。日誌ヲ書シ卒リ属者ノ不勉励ヲ憂ヘ精神ヲ挽回シ午後八時床ニ入ル。(十一月五日)

。一時ヨリ勉強セムント欲スルモ何如セン忍耐ノ精神ナク鬱ミタリシニ斯克アル可キニアラ子ハトテ自カラ励マシ遂ニ規律ヲ認メ居シニ宿婦食ヲ持チ来ル。(十一月六日)

また次のような事もあった。

。十一時迄受業。十一時飯食シ「アルゼブラ」ヲ預査シ須叟国許ヨリ書面来。其考ニハ殆ト困遂夕食シ七時ニ返リ八時迄之

ヲ考エ八時ヨリ午前十一時^(ママ)ニ至リ始テ終リ就床ス。(九月三十日)

。此日午前七時過國許ヨリ書簡来リ徵兵ノ一事ヲ謂リ。依テ徵兵改正令ヲ檢セント欲シ一時過ヨリ義塾ニ至リ四時ニ至ルマテ各室ヲ巡廻シ復途迫田氏栖居ニ入り直チニ返リ金ヲ携エ二丁目静海堂ニ行キ徵兵令編書ヲ買ヒ返リ食終リ間モナク蜂須賀氏来リ七時半頃帰レリ。時ニ雨降り来リシヲ以テ余蝙蝠笠ヲ持チ行ケリ。夫ヨリ九時頃迄國許書復^(ママ)ヲ書シ卒リ十一時頃迄讀書シ而シテ眠ル。(十一月二十日)

。午前六時半出床洗面シ直チニ出寓。改正令及答書ヲ送郵センガ為三田本通りヨリ義塾ニ造リシハ七時ナリ。(十一月二十一日)

國許からの書面とは第一の期間(五月三十一日)にもあったように弟熊之助からのものであったかもしれない。何を連絡して来たのか残念ながら日誌のこのあとの記事にも具体的にふれるところはない。また十一月の徴兵のことというのも森田家長子としての勝之助自身のことではないはずであるし、弟熊之助も徴兵令ではなく何を問う書信だったのであるか。このあと十二月一日には、

夫ヨリ十一時迄受業。右媛リ松本重三郎氏方ニテ一休シ本日報知新聞ヲ受取り応接間ニ於テ之ヲ読ミイタリ。其意ハ幹事^(部)渡辺久馬八氏ニ面セン為ナリ。折柄同子来レリ。即チ止塾ヲ談セシニ和田義郎氏ニ相談ス可シト答タリ。

とある。渡部を訪ねることは「内塾ノ事ヲ渡部久馬八氏ニ談セン

ト欲シ」とあって十一月二十七日にもありこの日は前後三回、また二十九日にも二回学校へ出かけ結局不在のため面会を果さなかったあとのことであった。また十二月五日の記録によれば「外国留学ノ事ヲ思ヒ而テ寝ス十一時過ナリ」ともある。この前後、例えば十二月三日には「男湯ニ之キ還リタルハ午後一時ナリキ。時ニ精神錯乱シ竟ニ八時迄恢復ニ時ヲ移セリ。夫カラ警戒ノ章目ヲ書」とあるのは、翌四日に「昨三日ヨリ一事ヲ廢セリ。是他ニ非ラス喫煙ヲ廢スルノ一事ナリ。此事ハ屢々企ダテシト雖氏未タ其功ヲ遂グル能ハザリキ。然レ氏今度ハ決心シ其効ヲ顯サント欲スルナリ。」とあるように禁煙によるもののだが、なおそれ以外にも、

。晩食シテ乃チ迫田氏栖ヲ訪ヒ七時三十分頃ヨリ春日^(寄席)寄ニ共ニ之キ其費ハ皆迫田氏払エリ。十時ニ帰ル。夫ヨリ往前ヲ考エ十一時ニ及ヒ寝ス。(十二月七日)

。夕餐シ出栖シ四国町大崎ナル下宿屋ニ往キ山本義平氏ヲ尋子^(ネ)岩谷彦三郎氏室ニテ七時迄談話シ而テ帰栖シタリ。夫ヨリ慷慨ニ堪エス午後十一時迄忍耐ナキヲ憂ヒ弥確固タル心志ニセシ事ヲ期シ而シテ同時寝ス。(十一月八日)

。諸氏ト談話シ六時三十分頃帰寓。昨日ノ日ニ新聞ヲ読ミ而シテ八時過床ニ入り十一時頃眠[□]フ怠ト謂サルヲ得ス。(十二月九日)

。日ニ新聞ヲ読ミ代数ヲ終リ英国史復読姑ラク午後十時ニ及ビ床ニ入り一時間誠辞ヲ考エ午後十一時過ニ眠ル。(十二月十日)

などという記事が続くのは自らの周辺を取りまく状況の変化の中にやや不安定に揺れ動きながら勉学を続けているこの時期の森田勝之助の心境を示しているものと考えられる。十月二十一日に「福沢先生ニ面晤セントセシカ来人アルヲ以テ面セス」とあり翌二十二日に面会を果していることがあるのもあるいはこうした状況を訴え助言を得ようとしたことかもしれない。なお渡部久馬八は越後長岡藩士として慶応四年一月に二十二歳で入塾、一時帰郷して長岡戦争に参加、再び帰ったときには鉄砲疵のため独眼になっていたという。明治十一年当時の風貌が伝えられているが、どこから見ても壮士の頭目か山賊の張本、学校よりも山寨にでも立籠りそうな人体で、荒っぽかった明治初期の学生を扱うには格好な人物であったという。⁽²⁶⁾「幹事」というのはこの場合「社中之約束」にいう社中の事務を司る「執事」、より具体的にはそのうちの「塾監」のことをさすと考えられる。「社中之約束」のうち執事之職務大概として「入社退社入塾退塾ノ事ヲ司ル」と規定される一項に従っての相談だったのであろう。和田義郎は慶応二年十一月に和歌山藩留学生として入塾の人。天賦温良剛毅にして争を好まざり純然たる日本武士家風の礼儀を有する半面骨格たくましく柔術をよくした豪傑であったという。⁽²⁷⁾福沢の信任厚く初代幼稚舎長としてその基礎をつくった人物である。

(3) 明治十三年八月〜九月

〈再入寮〉 森田日誌第三の期間は再び寮生活である。それは日誌の記事から読みとれるものであるが、また明治十三年「金銭出

納記」の記録によってもその間の事情がいくばくか判明するものである。

「金銭出納記」の記事は五月から九月までの出金を中心としてほかに入金・貸金・借金についてもあわせて記録されているものであるが、その五月一日付の出金をみると次のようになっている。すなわち、一月分義塾月俸一円八十六銭、一月分菜代八十五銭五厘、三月分下宿屋青山清秋方払四円四十九銭、四月分下宿屋春川□方払三円四十六銭八厘、義塾月謝及塾費二円とある。また同じく一日付で、田中ヨリ典物請出十円十九銭、天満屋ヨリ典物請出拾二円六十四銭、佐倉質屋ヨリ右同シ七十九銭五厘とあって質物を請け出している。また松本重三郎氏返渡一円、田村幸作氏返渡十銭、小遣ヒトシテ井上要三郎氏ヨリ借用二円十銭五厘とあり、さらに「右総計三十八円五十銭三厘也、右本年入塾ノ節井上要三郎氏ヨリ借用スル者也」とある。「月俸」とは前述のように寮生としての賄代であり、一月に寮生活、二・三月には下宿生活であったということになる。一方、「社中之約束」(明治九年四月改鑄)にみる「入塾退塾之規則」によると、

一 一旦入塾セシモノハ病氣其他止ムヲ得ザルノ事故アルニアラザレバ其期中ニ外宿スルヲ許サス(明治十三年七月版になし)
一 外宿セシ生徒再ヒ入塾ヲ求ムルヲアラバ執事一同ノ許可ヲ待ツベシ但シ再ヒ入塾スルモ入塾金ハ納ムルニ及バズ

一 退塾及外宿セント欲スル者ハ兩三日前ニ其趣ヲ塾監局ニ告クベシ尤モ退塾外宿ノ当日ハ証人ノ証書ヲ持参シテ塾監局へ差出すベシ

とあって、原則的には学期中(この場合、第一期として一月より四月までになる)の外宿は認められないはずであり、何か特別な事情があったものと思われる。さらに五月一日付の出金としてさきの記録に続けてなお、桜川町ヨリ三田マテ荷物運送人力車代六銭、ヒゲソリ代二銭五厘、煙草壹銭、野紙半紙塵紙各二枚ツツ十二銭、下駄直シ賃三銭四厘五毛、シャボン壹個十銭、摺付木拾二箱三銭九厘、足袋一足十四銭という記録がある。また別のページの記録によれば五月と八月分の寮生としての「賄代」がそれぞれ月末に支払われていることがわかる。桜川町とは学校にほど近い西久保桜川町であろう。下宿の所在地かと思われる。ともあれ五月一日、かなり大がかりな身辺整理を行って再度(再々度)の寮生活に入ったとみられよう。第九表にみるようにこの年第一期の成績がかなり落ちこんでいるのもこの間の事情を反映しているように思われる。

井上要三郎なる人物は「入社帳」にはその名がみえない。しかし「法律学校入社帳」には明治十二年十二月一日付で「本塾生」として入学の記録があり、また後年の「塾員名簿」によれば明治二十三年に「特選塾員」として慶応義塾卒業生の待遇を受けるようになっていいる。「学業勤惰表」には、明治十三年第一期に科外乙組と法律学校のクラスに、同年第二期及び第三期には科外丙組にその名を見ることが出来る。また明治十五年四月二十五日付で森田勝之助の弟熊之助(慶応元年生)が入学しているが、「入社帳」の記録によれば、保証人として「赤坂区青山北町五丁目十六番地」士族、井上要三郎」の名が記されている。また明治二十三年版の

「塾員名簿」によれば、現職として「愛媛県庁」に係していること、明治四十四年版の「塾員名簿」によれば「三田四国町二ノ四」に「下宿業」を営んでいることと、「原籍東京」であることなどが判明する。日誌中にもしばしば登場して勝之助とも親交のあった人物であるが、明治十三年九月十四日の日誌の記事にも「夫ヨリ浴場に往カント欲セシカ小遣已ニ尽キシヲ以テ井上要三郎氏ヨリ受取ラント欲シ同氏ノ室ニ入りシカ」などと記されており熊之助ばかりでなく勝之助にとってもかなり年長の保証人格の人物だったのでないかと思われる。

〈夏期休暇〉 明治十三年八月というのは、この年五月以降の寄宿舎生活も一学期間を経過して予備科一番のクラスに進級し、第九表にみるように前期にくらべて著しく向上した成績をえて休暇に入ったところである。もっとも休暇といってもその生活はこれまでと大きく変るところはない。第十二表はそれを示している。午前中に一時間前後のギリシア史の聴講がある。この表では二日間だけであるが、次の週では連日さらに翌週では二日間の聴講をしている。三日の記事をみると

塾監局ヨリ揭示アリ曰ク算術書并ニ課業外ノ書籍ハ十一時ヨリ十二時ニ至ル一時ニ貸与ス可シト。余是レヨリ先井上要三郎氏ト共ニ梅木忠朴氏ニ不審ヲ質シ休業中ニ一書ヲ読マント(ママ)
約セヨリ依テ書籍ヲ借ラントテ室ヲ出テ書籍ニ至リ「ハイエル」一冊「アルゼブラ」一冊「ギリキ史」一冊凡テ三冊ヲ借リテ販室ス。

とある。日誌第一の期間で学んでいたギリシア史の復習になるのかはわからないが、休暇中の課外勉強の計画の一部ということになる。梅木忠朴という人物は「入社帳」の記録によれば愛媛県出身士族で明治十年十月に入社しておりこの時の年令は二十歳で本科四等に在籍している。その後明治十四年に卒業し、明治四十四年の「塾員名簿」によれば神戸市立兵庫実業補習学校の教員となっている。森田にとっては同窓の先輩になるわけで、

。九時ヨリ例ノ如ク和歌山新聞ヲ携テ四番講堂ニ於テ待ツ事暫ク梅木氏等不來。仍テ絢堂子室ニ行見スル不在。又梅木子室ニ行ケハ絢堂子外三四名來會セリ。梅木未夕朝食モセザル様子。蓋シ本日は休課スル積リナルベシ。余忽チ出テ夫ヨリ同十二時迄新聞等ヲ読ンテ消光ス。(二十三日)

。是時絢堂子來リ本日モ梅木氏不例ナレハ休講スト報セリ。(中略)井上氏ト散步シ愛宕山ニ上リ而テ三田地蔵ニ之キ同子梨子ヲ買ヒ返リ梅木氏室ニ入レリ。時ニ三四輩相會シ西瓜ヲ喰ヘリ。余モ絢堂子ト西瓜ヲ喰而ル後又梨子ヲ出シ衆子ト食シ同十時半歸室乃チ臥ス。(二十四日)

なども記録されており塾内における勉学の実際がどのように行われていたかを知らせてくれるものである。なお「ハイエル」は明治十三年七月版「社中之約束」中の科業表で本科五等に配されているハイエルの「アリスメチックジオメトリー」、「アルゼブラ」とは同じく明治九年版で本科四等に配されているロビンソンの「エレメンタリーアルゼブラ」のことであろうか。この他に休暇中の勉学は「英書」をよむことと「代数」「算術」などが中心で

明治十年代前半期における慶応義塾の塾生生活(下)

隨時自習をしている。また表中にみるように新しく公布された「刑法」を熱心に見ており八月六日に読了して北川礼弼に返却している。北川は「入社帳」の記録によれば明治十二年二月の入社で十四年に卒業して後に千代田生命取締役となる人物である。ほかに読書として名があがるものは馬琴の「朝夷巡島記」、「里見八犬伝」、「八十日間世界一周記」、「唐宋八大家」であり、また「通鑑」「温史」の名もみえる。漢籍を読もうとしていることについては八月六日の記録に

八田小雲⁽²⁸⁾ト云フ人ノ宅ニ赴ク。此人慶応義塾書籍文庫ノ漢書ヲ預カリ居ルヲ以テ該書借覽セント欲スルナリ。而シテ貸渡規則ノ余ノ心ニ協ハザル所アルヲ以テ借ラズ。

とある。規則の何が意にそわなかったのかわからないが、おそらくこのことの結果であって「通鑑」については井上要三郎を通じて借用することになったものである。(八月六日に「井上子來り通鑑ヲ持チ來リ呉タリ」とある。)
「朝夷巡島記」は友人中居照三より借覧のもので九月二日の一日をかけて読了している。「里見八犬伝」については八月十三日の夕刻より平井忠雄方を訪ね「別ニ譚シモナク只里見八犬伝ヲ見テ居タリ」というかたちでその名が記されているものである。「八十日間世界一周記」は八月十二、十三両日に北川礼弼の部屋で読み終えている。北川より借用しているものであろうか。中居照三(入社帳では照蔵)は埼玉県出身で明治十一年九月に入社、十二年一期に予備科・童子科二番に在籍し以後進級して明治十三年二期の予備科一番を最後に「勤惰表」にその名が現われない。この時点で十七歳の人物である。平

井忠雄は岐阜県出身で明治十二年一期の時点で予備科・大人科三番ノ一に在籍した森田の同級生であるが、十三年三期では「科外甲」十四年一期では「科外乙」のクラスに所属している。八月二十日の日誌に「十二時二十分ニ出版社ナル平井忠雄子寓ニ行キ午後一時五分塾ニ返リ」とありこの時点では十九歳ですでに学生としてより慶応義塾出版局の実務についていたものと思われる。

新聞雑誌についてみると、ほど毎日「東京日々新聞」に目を通しているがそのほかに「東京絵入新聞」「内外交際新誌」「和歌山新聞」「東海経済新報」「朝野新聞」「政談新聞」「囲碁新報」「近事評論」などの名がある。「日々」「絵入」及び「近事評論」は日誌の第一・第二期の間から引続くものであるがその他はこの期間にはじめてあらわれるものである。「内外交際新誌」は明治十二年五月創刊でわが国最初の国際外交中心の雑誌である。「東海経済新報」は明治十三年八月犬養毅により創刊された保護貿易を主張する経済雑誌としてわが国最初のもので、自由主義経済学者田口卯吉の「東京経済雑誌」に対抗するものであった。⁽³⁰⁾ 森田もその創刊号を手に行っていることになる。

。八時ニ及ヒ乃室ニ返リ東海経済新報ヲ読ミ同時ニ至ル夫ヨリ雑事同十一時臥ス(八月二十三日)

。午後一時迄休息シ乃四丁目湯ニ之キ出テ雑誌屋静海堂ニ行キ東海経済新報ヲ注文シ且ツ第一号ヲ持帰ル。(八月二十四日)

友人から借用して内容を確かめ自身でも継続購読を考え注文をしているようである。「朝野新聞」は明治五年十一月創刊の「公文通誌」が七年九月に改題され、成島柳北・末広重恭を中心として民

権派新聞として評判の高かったものである。⁽³¹⁾ 九月五日の記事に「梅木忠朴子室ニ之キ本月一日ヨリ朝野新聞ヲ取り来リ是ヲ読ミ」とあり共同購読であると思われる。「近事評論」についても九月八日に梅木室で読むと記されている。「政談新聞」については九月六日に友人森岡守衛より借用し以後数日の間に「第一号」「第四号」を読むといった記録がある。内容については未詳であるがおそらく創刊間もないものであるろう。「和歌山新聞」についてもよくわからない。「和歌山新報」(明治十年九月、十一年四月刊行)あるいは「和歌山日々新聞」(十一年六月、⁽³²⁾)のこともかもしれない。国元からわざわざ送らせているものであるうか。「囲碁新報」についてもわからないが、当時塾生たちの余暇に囲碁将棋が盛んであり森田自身もよく楽しんでる記録が日誌にみえる。

。二十三番室森常樹氏ト戦碁而シ返ル。寝ス。(八月二日)

。要三郎氏ニ帰塾ヲ促セシニ氏強ヒテ止ム。依昼食ノ饗応に預カリ囲碁将棋交闘ハス。(八月八日)

。食後又北川室ニ入り囲碁或ハ譚話シ午後三時ニ達ス……食後又々北川室ニ入りテ闘碁或ハ他ノ遊戯等(八月十二日)

。東京日々新聞ヲ読ミ、依其ノ新聞ヲ持チ行キ北川氏室ニ入り九時マテ闘碁或ハ譚シタリ。九時ヨリ十時過マテ梅木氏ノ講義ヲ聴キ而シテ又北川子室ニ留リ十時過ヨリ午前十二時マテ八十日間世界一周記前編ヲ読ミタリ。(八月十三日)

。三時ニ速ンテ習字ヲ初メ同五時二十分ニ至リ止ム。自夫出室シ北川子室ニ入り視碁須臾午後五時三十分ニ到リタリ。(八月十八日)

。一時ヨリ浴場ニ趨カントテ室ヲ出テシニ伊藤順四郎氏室ニ於テ人ノ鬪碁スルヲ見テ遂ニ午後二時ニ臻ル。(八月二十二日)。
。従同十一時於梅木忠朴氏室鬪碁至同十二時(八月二十九日)。
。本日発兌東京日日新聞ヲ読ミ至午前八時。従其刻到九時代数ヲ務メ夫ヨリ山田良作氏ノ大角豆ヲ接伴シ而シテ同子所有鬪碁新報ヲ見テ十一時ニ臻ル。(八月三十一日)

「鬪碁新報」は同室の友人山田良作の所有であったことがわかる。山田は石川県出身士族で明治十二年十月十八歳で入社しており、明治二十三年の塾員名簿では埼玉県浦和官舎二二八を住所としている。「郵便報知」についてはこの期間には読んでいないようである。記録がない。いずれにせよ各分野にわたる新しい情報に次々ふれていることは注目してよいことであると思われる。なお前年に盛んであった演説会活動は塾内一般にそうであったのか不明であるが熱が冷めたかに見え、八月二十五日の記事に「夕食後湯二行キ同七時塾ニ還ル時ニ有終社討論会ニ客員ナリ同十時半頃閉会」とあるのみである。なお八月十六日には梅木忠朴、森常樹、井上要三郎、岡田某と伴に浅草生村楼に出かけ印度人の演説を聞きに行くということがある。「午後三時過ヨリ演説ヲ觀メ六時ニ終ル。尤モ自国今古ノ沿革ヲ述ベタリ。同楼ヲ出浅草觀音辺歩シ某料理屋ニ入り杯ヲ傾ケ食喫シ緩歩而塾ニ還ル時ニ午後十一時二十分頃ナランカ。」とある。どのような演説会であったのか詳しくはわからないが興味深い事柄である。

明治十三年八月〜九月の日誌の中に新しく見える事柄としては書道をはじめたこと、またしきりに運動に重きをおきだしていること

明治十年代前半期における慶応義塾の塾生生活(下)

とがある。書道については井上要三郎の紹介によって日下部東作(鳴鶴)に師事している。麴町区平河町の日下部宅を訪ね手本を得て随時かなり熱心に稽古に励んでいる。日下部は六朝書道を骨子としたいわゆる鳴鶴流という独自の書風をつくり明治中期より大正年代にかけて多くの秀れた門下生を輩出して重きをなした書家である。⁽³³⁾

。午前六時起闔ス。昨夜ノ浄書ヲ認メ七時ニ至ル。乃該浄書ヲ携ヘ平川町日下部氏宅ニ至ル。正二八時過ナルベシ。書生四五輩坐ニ在リ皆浄書ヲ正矯シモライ而出行ケリ。予モ亦矯正ヲ受ケ終リ別礼シ而出宅ス。時ニ九時ナリ。(九月五日)

という記録がある。毎日曜に出かけているようで十二日、十九日にも同様の記事がある。当代一流の書家についているわけで八月十三日の日誌に「平井忠雄氏寓ヲ尋タリ。同子ニ嘗テ約スルニ日下部氏書ヲ一見セシメン事以テシタル事アリシ故ニ今宵約ヲ踐シテ楷書手本ヲ携エテ同子ニ示セシナリ」といった記事が見える。

〈運動〉 学業の合い間に意識的に体調を整えようとしているらしいことはすでに日誌の第二の期間に「散歩」の記事がかなりみえることから考えられる。この期間にあっても「遊歩」「散歩」「逍遙」などとして育種場、芝公園、麻布辺、品川汽車停留場、常磐橋辺、神明町小富士、愛宕山、万世橋辺、京橋辺等々かなり遠方へも足を伸ばしていることが記録されている。「育種場」とは旧薩藩邸跡を中心に約五万坪にも及ぶ広大な敷地をもった内務省勸農局育種場である。⁽³⁴⁾ 学校にほぼ臨接しており格好の散歩の目的地で

あつたらしい。また九月十日には

井上要三郎子室ニ入り預テ第二第四土曜ニハ遠路ヲ運行セント約束セシ事ナレバ翌日ハ如何ス可キヤト問ヒシニ同氏モ差支エアリ余モ又多忙ナレハ来ル廿三日ハ祭日ニシテ休業故同日ニ延引ト決シ

という記事があつて、このような散歩や遠出の外出がかなり計画的に考えられていたらしいことがわかる。またこの期間のとくに九月になると午後の二時間ほどを「運動」「体操」にあてるようになってゐる。具体的な内容はいづれも「和田柔術場」における「撃剣」であつた。明治十二年十月二十四日の日誌に「和田柔術場ニ衆童ノ戯ヲ見テ」という記事があり、和田柔術場とは主として幼稚舎の施設として設置されたもので舎長和田義郎の名を冠して呼ばれてゐるものではないかと思われる。

。午後一時卅分訖受業。而如約与池田卯三森岡守衛両氏。和田柔術場做撃剣。至同時三十分。(九月二日)

。正字三拾分代数受業。午後一時卅分ニ至ル。雑事二時ニ及ブ。本日森岡守衛子不來。又池田卯三子取次当番ナルヲ以テ撃剣休ミト決シ松原岩次郎子室ニ行キタリ。(九月四日)

。午餐ヲ喫シ而朝野新聞ヲ讀ミ午後一時ニ至ル。其ヨリ体操ヲセントテ運動場ニ往ケリ。時ニ数童群リ空氣球ヲ弄スルノミ。別ニ仕方モナキガ故四番松原岩次郎氏室窓ニ倚リ譚一二語。乃チ廻々室ヲ尋ヌレ氏撃剣ノ敵手モナシ。(九月十日)

。夫ヨリ雑事午後二時ニ至ル。而体操セントテ出室セシカ撃剣ヲナスモノナシ。依テ止ヲ得ズ室ニ入り(九月十六日)

などという記事が記されている。「数童群リ空氣球ヲ弄スル」とはどのようなゲームをしていたのであろうか。相手がなく中止をしている時もあるわけであるが九月一日より二十五日までの間にこれらの記事を含めて前後十三回ほど柔術場あるいは運動場へ出ておりかなり熱心に運動に励んでゐることがわかる。なおこの内の一回は撃剣ではなく「射弓」である。九月十一日に「弓弦」を買いに外出しており翌十二日に山田某より誘われて「運動場ニ往キ弓ヲ射ル事暫ラク」という記事をみることが出来る。撃剣の仲間としては池田卯三、森岡守衛の名が多く挙がり他に福島正七郎、関勘助、堀三事、山岸毅一郎の名が記されている。池田、福島、山岸については入社帳の記録がない。池田は法律学校入社帳に明治十二年十二月一日付入学の記録がある。また十三年七月十七日に開催された議事演習会では書記を勤めてゐる。⁽³⁵⁾この時に同じく書記に福島正七の名があるがこれは福島正七郎であるかもしれない。森岡は森田日誌一、二いずれにも登場し日誌中の姓名録にも記載されている。入社帳によれば青森県士族の出身で明治十年一月に入社、十二年に十五歳で童子科一番のクラスに位置してゐる。また法律学校へは十三年六月二日付入学の記録がある人物である。関は東京出身士族で明治十年九月入社、十二年の段階では森田とは同級の大人科三番に位置し十八歳である。堀は愛媛県出身の士族で明治十二年二月に二十一歳で入社やはり大人科三番に所属してゐた人物である。

〈九月・授業再開〉 九月に入つての授業では第十三表にみるよ

うに「米國史」「窮理書」「代数」に出席しており明治十三年七月版「社中之約束」の予備科一番に配当された科業にほぼ従っている。表にみるように朝食後あるいは午後後に随時予復習が行われており、また九月十三日の日誌をみると「八時ヨリ九時マテ目痛ヲ生セシヲ以テ横臥シタリ。九時ヨリ十一時マテ代数ヲナス。本日出席セザリシハ預読ナキ故ナリ。十一時ヨリ十二時マテ代数受業出席」などあって米國史と窮理書の授業に欠席の記録がある。塾生一般にそうした緊張した勉強態度が要請されていたと考えられる。

ところですでに記したように森田日誌第三の期間に重なって明治十三年九月の「日課表」なるノートがある。冒頭の部分を抄出してみると次の通りである。

明治十三年九月一日ヨリ左ノ如ク日課ノ時間ヲ定ム

- 從午前四時至午前五時 課業 一時間
- 從午前五時至午前六時 体操 一時間
- 從午前六時至午前八時 庶事 二時間
- 從午前八時至午前九時 課業 一時間
- 從午前九時至午前十一時 受業 二時間
- 從午前十一時至 十二時 課業 一時間
- 從午 十二時至午後一時 体操 一時間
- 從午後一時至午後二時 受業 一時間
- 從午後二時至午後三時 庶事 一時間
- 從午後三時至午後五時 課業 二時間
- 從午後五時至午後六時 庶事 一時間

明治十年代前半期における慶応義塾の塾生生活(下)

從午後六時至午後八時 体操 二時間

從午後八時至午後十二時 課業 四時間

從午後十二時至午前四時 寢眠 四時間

此定規ニ違背スルキハ詳ニ時日ト状況トヲ誌ス可シ

九月一日。午前四時ヨリ同五時三十分迄晏起ノ為メ其業ヲ欠ク。午後三時ヨリ五時ニ至ル午睡ノ為メ欠課ス。

二日 午前四時ヨリ五時迄晏起ノ為メ欠課。午後三時ヨリ体操運動入湯ノ為メ四時マテ欠課。五時ヨリ同卅分迄読書ス

三日 午前六時マテ寢ス。午後八時ヨリ同十一時迄徒消ス。午後十一時ヨリ寝ス

四日 午前六時ノ晏起ナリ。午前八時ヨリ同卅分迄日誌ノ為メ課ヲ欠ク。午後三時ヨリ同九時マテ狸蕎麦ナル福沢

先生ノ別荘ニ花火アリテ是レガ為メ見物ノ為メ凡テ欠課ス六日。午前六時ノ晏起ナリ

「睡眠」四時間、「課業」「受業」十二時間という猛烈な規律である。実際には午後一時間の受業は行われず午前九時より十二時までの時間帯で消化されていたり、また次の九月四日の日誌本文にみるようなこともあった。

松原岩次郎子室ニ行キタリ。譚話ノ処へ渡辺久馬八子来リ狸蕎麦ナル福沢先生別業ニ於テ花煙打上リ君等行ク否ヤト。満座曰ク行カント欲スト。而テ尚無益ニ送光シ午後三時ニ及ブ。輒チ予室ニ帰ル。翌日ハ日曜ナルヲ以テ清書シ置カント着机セシ門外井上要三郎氏ノ声ヲ聞ク。蓋シ火花ヲ觀ント

テ行ク所ナリ。予載チ意ヲ転シ午後三時半ヨリ狸蕎麦に向テ
 出行ケリ。己ニ至ル衆童是レニ交ルニ大中人ヲ以テス。水泳
 シ或ハ囲碁等ヲ做シ午後五時頃ニ及ブ。時ニ(難読)福沢先
 生ノ御馳走ナルカ乃チ握飯ヲ喫シ昼火花己ニ終リ夜火花ヲ中
 途迄シテ予久保田某ト相伴ヒ返リ四丁目湯ニ入り三田地蔵ノ
 縁日ナレバ緩歩シ大崎氷店ニ立寄り而テ塾ニ還ル。午後八時
 卅分ナリ。九時訖休足ノ体ナリ。九時ヨリ浄書ヲ認メ十一時
 ニ至リ未タ成ラス業既ニ眠情盛ナリ。依テ寝ス。

自ら課した規律を犯してしまう悔悟の念が行間に窺われるようである。やや遡るが次のような記録もある。

従同五時入湯至同三十分餐後稜ヲ出テ平井忠雄氏ヲ尋ヌ。又
 他行ナリ。乃又森岡守衛氏寄宿ニ造リ談スル少間アツテ予曰
 ク散行セント欲ス。君何如。森岡曰ク吾レ欲セザルナリト。
 予仍テ出テ北川礼弼氏僑ヲ問ヒシニ不在ナリ。仍テ育種場内
 ニ入り円馬場ヲ一回シ而テ校ニ還ル。七時ナリ。廿四番室森
 常樹氏方ニ入りタリ。時ニ井上角五郎子座ニ在リ。談須臾テ
 井上角五郎子水ヲ汲ンテ来ル。皆曰ク菓子カ或ハ馳走ヲ望ム
 ト。乃チ「ジャンケン」ノ説起ル。又伊藤順四郎氏来リ四人
 「ジャンケン」ヲ為ス。井上角五郎子其任ニ当ル。稍アツテ
 同子菓子ヲ买来ル。即之ヲ食シ食後午後十一時マテ種々ノ話
 譚ヲナシ而テ室ニ飯ル。本日ノ日誌ヲ書シ而消灯ス。(八月
 卅日)

森常樹は熊本県出身士族、明治十二年三月十九歳で入社、十四年
 に卒業し後に慶応義塾幼稚舎長となる人物である。井上角五郎は

入社帳の記録がないが広島県出身、のちに朝鮮に渡り甲申事変に
 関係して帰国しさらに政界に入って活躍した人物である。⁽³⁸⁾八月四
 日の記録にも「菓子仲間ヲ組ム」ということがありここでは森の
 居室⁽³⁹⁾でいわゆるアマダが行われたのであろう。このように寮生活
 を十分満喫し充実した学生生活を展開させていることが窺われる
 記事があちこちに見られるが、一方で先きの日課表の存在を重ね
 合わせるとそうした雰囲気には必ずしも浸りきらず勉強その他に忙
 しくしながら常に不安感が潜在しているようにもみえる日誌の記
 録群である。とにかくいささか現実ばなれのした日課表で日誌本
 文にもしきりに「日誌ヲ書シ七時四十二分ニ至ル。夫ヨリ十時迄
 半分ハ真ノ居睡り半ハ読書(九月六日)」といった記録があらわれ
 るように、結局は「殆ント悉ク程期ヲ犯ス(九月二十四日)」とい
 うことになるわけであるが、むしろこの滑稽ですらあるちぐはぐ
 な記録の中に青年森田勝之助の真摯な実像がみられるように思
 う。ともあれこうした努力の集積が明治十四年一期には本科五等
 へと進級していくことに結実していくのである。

五 む す び

「慶応義塾中之約束」「慶応義塾学業勤惰表」そして「森田日
 誌」に従いながら、森田勝之助の塾生生活を追って来た。そして
 それは不十分ながらも明治十年代前半期における慶応義塾の塾生
 生活のアウトラインを明きらかにすることになったかと思われ
 る。

しかし科業表にまとめられたテキストについての分析が出来ていないこと、また「森田日誌」自体にそうした記述がほとんど見られないことなどから、森田のひいては当時の塾生たちがその学業生活を中心としてその主体をどのように形成していったのかといったことがらについて踏みこんだ考察が出来ていないことなどなお課題を残している。

森田自身の学業生活について要約すれば科業表所載のテキストを順次消化して行くことが軸であった。そしてそれは着実に進められ進級して行く。一般の読書については通俗書が主であったようである。福沢の著書などについてふれるところがないのはどのようにに解すべきであろうか。しかし森田の場合にあっては、むしろ当時から創刊され流布していく新聞雑誌についてかなり積極的に取りこんで知識を吸収しているらしい点、さらにどちらかと言えばそれが民権派ないし慶応系のものが主であった点に注目すべきかもしれない。森田の読んだであろうさまざまな記事について具体的に取りあげてみる必要もあると思われる。そしてまた多くの寮生・下宿生との交流の中に、たとえば当時塾内の一般的傾向でもあったが演説活動に熱中したことなど吸収したものが多かったであろうことも推測しうる。またいわゆる自由民権運動の展開との関わりの中で塾内外における「演説」の意義についてもなお追求が必要であると思う。のちの森田の諸事業についての研究も含めて今後再考の機会をえたいと考えている。

注

- (1) 「慶応義塾名流列伝」五七九―五八〇ページ
- (2) 「松永安左衛門自伝」の一節(明治二十九年、二十二歳の頃)に次のように記されている。
それまでいた下宿先の綱町の称名寺を出て三田山上の寄宿に入った。奥平家の屋敷そのまま、大きな玄関には時刻の鐘がつるしてあり、広い長い廊下の左右に部屋があつて、五人十人と寝泊りしていた。その向いが福沢先生のお宅で、玄関に出入する馬車などがみられた。
- (3) 西田長寿「明治時代の新聞と雑誌」八三、一四一―ページ
山本武利「近代日本の新聞読者層」三五六―ページ
- (4) 西田、前掲書九二九四―ページ 山本、前掲書三五五―三五六―ページ
- (5) 西田、前掲書二八―二九、四〇―四二、四七―ページ
- (6) 西田、前掲書、五六―ページ
- (7) 山本、前掲書、七二―ページ
- (8) 西田、前掲書、五八―ページ
- (9) 明治期東京の湯屋の特色として近郊に「新温泉」と呼ばれる鉱泉の湧し湯が出来た。草津・有馬など有名な温泉の名がつけられ温泉旅行の擬似体験を提供しまた待合よりも手軽な遊び場として賑った。三田温泉もその一つか。町内の銭湯では江戸と変らず湯上りに二階で茶を飲み談笑を楽しむ場でもあった。
- (10) 「明治大正図誌・東京一」四八―ページ参照
- (11) 「福沢諭吉年譜」(「福沢諭吉全集」第二十一巻五二八―ページ)
- (11) 「道聴途説」明治十二年三月二十二日の項、(「慶応義塾百

年史・付録」二一七ページ)

- (12) 「福沢諭吉全集」第十七卷、七四〇ページ
- (13) 「慶応義塾百年史・付録」二三一ページ
- (14) 「慶応義塾百年史・付録」二二三ページ
- (15) 西田、前掲書、二七、四〇―四五ページ
- (16) 西田、前掲書、八三ページ
- (17) 西田、前掲書、八〇ページ「河出版・日本歴史大辞典」近事評論」の項
- (18) 西田、前掲書、一三四―一三五ページ
- (19) 「河出版・日本歴史大辞典」、「嚶鳴雜誌」の項
- (20) 「慶応義塾百年史・上」六七九ページ
- (21) 「慶応義塾百年史・上」六二二―六八七ページ
- (22) 「平賀敏君伝」八七―九〇ページ
- (23) 「骂堂自伝」四〇ページ
- (24) 「民権」一八〇ページ 埼玉民権運動史年表
- (25) 森田家文書、「和歌山県史・近現代史料四」一八四ページ
- (26) 「慶応義塾百年史・上」五九七―六一〇ページ
- (27) 「慶応義塾図書館史」一七ページ
- (28) 「慶応義塾百年史」五四五ページ

(28) 八田は福沢と同じ中津藩士。維新後も東京に留まり福沢より十歳年長であるがその初期の出版業などを助けた。出版局が出来てからも朝吹英二の下で出版の監督売捌きなどに従った。明治十二年、演説館脇に独立した木造家屋で「文庫(若くは書籍庫)」として義塾の本格的図書館が設立されたとき、文庫近くに住居を得てその事務に従事した。(「慶応義塾図書館史」三八ページ参照)

(29) 西田、前掲書、八〇ページ

- (30) 西田、前掲書、八一ページ
- (31) 西田、前掲書、四二ページ
- (32) 西田、前掲書、七五ページ
- (33) 「大日本人名辞書」(講談社学術文庫)「世界大百科事典」(平凡社)、「日下部鳴鶴」の項
- (34) 「新修港区史」四四三ページ
- (35) 「慶応義塾百年史・上」六八五ページ
- (36) 「慶応義塾百年史・上」六八五ページ
- (37) 麻布広尾原の一面を俗に狸蕎麦といった。明治八、九年頃以降に福沢家別荘が設けられ、のちに寄宿舎(大正四年)さらに幼稚舎(昭和九年)の用地となった。(「稿本・慶応義塾幼稚舎史」五六六―五六九ページ)
- (38) 「慶応義塾出身名流列伝」二二―二二二ページ
- (39) 「森田日誌」の第三の期間では寄宿舎生の居室番号がかなり記されているので次に整理してみる。――四番松原岩次郎、五番堀三事、十番益田英治、十五番井上要三郎、十七番米島某、二十三番北川礼弼、中川曹亮、二十四番森常樹、三十六番梅木忠朴、番号不明同堂森田勝之助、山田良作、森田隣室佐藤某。なお森常樹については二十三番と記されているのが一個所ある。

付記 本稿は慶応義塾学事振興基金による共同研究「明治期における福沢及び門下生の研究」の一部である。

追記 本稿入稿後、慶応義塾史資料室へ寄託されている福沢家旧蔵資料中から、佐志伝氏によって、「精干社員」(本文、演説の項参照)の集合写真が発見された。裏書に「呈福沢先生、明治十二年十二月十四日」とあって、和田基太郎(大分)、梅木忠朴(愛媛)、波多野一(山口)、高嶋鉦橘(群馬)、池内源太郎(鹿

児島)、広田靱平(兵庫)、宮内直挙(愛媛)、高橋正信(東京)、坂井次永(青森)、枝元長辰(鹿兒島)、久野英吉(三重)、盛喫三郎(高知)、黒川正(静岡)、渡辺脩(愛媛)、国枝義光(高知)、岩崎居貞(高知)、豊島満俊(愛媛)、井出徳太郎(高知)、森田勝太郎(和歌山)という社員十九名の連名のあるものである。森田勝太郎は森田勝之助であろう。本文中に引用した森田日誌の十二月五日の記事(一一ページ)に対応するものと考えられる。参考資料として追記しておきたい。本稿をまとめるにあたって、佐志氏には種々の助言をいただいた。お礼を申し上げます。

第10表 森田日誌 (明治12年5月)

大人寮 二寮 28番室

時刻	5/25 (日)	5/26 (月)	5/27 (火)	5/28 (水)	5/29 (木)	5/30 (金)	5/31 (土)
5		起床	起床				
6	起床	諸事	雑事				
7	雑事	日誌		起閤	起床		起床
8	山本・迫田来	予読(グリーンキ史) 迫田来, 木下室へ	譚話 片山・桐原 矢野・武等	雑事	雑務		加藤へ
9	駿河町越後屋へ	グリーンキ史 出席	越後屋ヨリ品物	キリーキ史 出席	グリーンキ史 出席		会計局へ
10		読書 岡村, 山本来		日誌	質屋へ		小試業(谷井室)
11		博物史出席		博物史出席	博物史 出席	(算術試業欠席)	温泉 迫田
12		温泉へ 岩谷, 岡村, 迫田		予読 (博物史)	何事モナサズ	起床, 雑務	喫食 (丸久)
1	喫食 (安井)	喫食 迫田来	食後 一モ為ス事ナシ	飯後迂路タリ 丁子湯ニ行ク	報知新聞読ム 絵入新聞読ム	近世史略読ム	青山へ
2	山本宿所へ	書面ヲ認ム				喫食 迫田室へ 近世史略 読了	
						絵入新聞読ム	

3					岩谷へ 温泉へ	勉強ノ方法ヲ考 エル 蜂須賀来	帰室 木下室へ
4	岡村宿所へ					グリーキ史読ム	
5		勉強	国許へ書状				書面ヲ認ム 郷里熊之助へ
6	帰塾・食事 岡村宿所へ 備前屋へ 吉田宿所へ	食事 迫田室へ	食事 加藤来 就床 ニキビ痛ミ激シ	何ヲシタルカ 知ラス	水野室へ	食後 迫田室へ	
7		山本宿所へ		就床			
8						帰室	
9	帰塾 竹屋へ	丸宿所 山本			神明前吉野亭へ 迫田		
10	帰塾 迫田室へ	帰塾 野田来		就寝			奥田室へ
11	就寝	就寝				就寝	帰室・就寝
12					帰塾 セカントリートル 読ム		
1					就寝		

第11表 森田日誌 (明治12年11月~12月) 三田切運町 古庄文三郎方

時刻	明治12年 11/30 (日)	12/1 (月)	12/2 (火)	12/3 (水)	12/4 (木)	12/5 (金)	12/6 (土)
5							
6					出床 雑事・食事 義塾へ		
7		出陣 朝食 義塾へ	起床 喫食	出床 雑事		出床 朝食 義塾へ	
8		蜂須賀, 山本	義塾へ				
9		授業	授業	授業	授業 (3課)	授業	
10	出床, 食事 義塾へ						(後桃園天皇 100年祭 休業)
11	帰宿 昼食	松本へ 報知新聞 受取	帰宿, 食事 報知・日々新聞	帰宿 報知新聞	帰宿 報知・日々新聞	帰宿 日々新聞	
12	日誌, 本月金銭出納調査	渡辺久馬八 帰宿, 食事 入浴 (男湯)	義塾へ 山本, 奥田, 松本 蜂須賀, 野田	食事 入浴 (男湯)	食事 入浴 (万寿屋)	森岡来 精干社集会 (14番講堂)	出床 諸事
1		嚶鳴雑誌	帰宿 経済書復読	精神錯乱 (禁煙?)	習字		
2			義塾へ		義塾へ 新聞	日影町竹谷へ (写真屋)	(終日風雨)

3	岡村来 囲碁	英国史 予読	正則授業 (キーリング・語学)		語学 出席	松平へ 迫田へ	男湯 讃岐屋 人情本ヲ借リル 夕食 就床 人情本ヲ読ム	
4	喫食 松本来 岡本帰	夕食, 日誌 第3リードル, 習字	帰宅 習英字, 夕食 義塾へ	警誠章目ヲ書ク	晩食 散歩 松平下宿へ 地藏縁日	食事 迫田・蜂須賀 松本来		
5		出寓, 飯倉へ 蜂須賀 迫田	水野室		読書			
6	岡村へ	エコノミー予読 (4時間)	就寝			ソバ屋へ 帰宿		
7	義塾へ 丸, 山本	帰宿 経済書ヲ読ム			就寝			
8	迫田寓へ 物価新報 受取ル		日誌			就寝		
9	帰宿 警戒ノ事ニ従 ウ	就寝	就床		就寝			
10		就寝	就寝					
11	就寝		就寝					
12		就寝	就寝					
1	就寝							

第12表 森田日誌 (明治13年 8月) 寄宿舍在舎

時刻	8/1 (日)	8/2 (月)	8/3 (火)	8/4 (水)	8/5 (木)	8/6 (金)	8/7 (土)
5—					出床 掃除 日記 食事		
6—							出床 食事他
7—	起床 雑事	出床 雑事	出床 雑事	起床 朝食掃除 新聞	東京日々新聞 英書をよむ	出床 食事・掃除	東京日々新聞 唐宋八大家
8—	刑法を読む	東京日々新聞	刑法をよむ	グリーキ史 (梅木忠朴)	治罪法をよむ	梅木 講義	英書
9—		馬琴「朝夷巡 島記」をよむ		新治罪法をよむ			
10—			東京日々新聞 来島へ回達	居眠り	昼寝	東京日々新聞 北川礼弼へ回達	関勘助(14番室) と遊ぶ
11—	諸室巡回遊ぶ		塾監局掲示 書籍借出し	井上要三郎室 (15番室)へ行く 金を借りる	算術	日記 治罪法をよむ 磨墨	
12—	食事	食事	食事 北川礼弼(23 番室)と話す	食事 平井忠雄下宿不在 帰塾 遊談(10 番室) 菓子仲間を組む 益田英治	食事 休憩	喫食 休憩	食事 昼寝
1—	午睡	「朝夷巡島記」 をよむ				治罪法をよむ 磨墨	
2—			新治罪法をよむ		治罪法をよむ	肆字(習字?)	

3			日記をかく					
4			肆字(習字?)	習字	習字	習字		
5			日記を書く	ハイエルをよむ		英書をよむ		
6	なす事もなし	食事 「朝夷巡島記」 をよむ 読了 中居照三へ返却	食事 運動場に行く	塾中徘徊	治罪法	夕食	休憩	
7			男湯へ行く 散歩(三ノ橋→ 二ノ橋→赤羽 橋) 井上要三郎	夕食	入湯	八田小雲宅へ 平井・守岡・育 種場 丁子湯		
8			戦碁 森常樹 (23番堂)	帰塾 禁煙決意	森岡守衛を訪ねる	平井忠雄を訪 ねる	帰塾 治罪法読 了 北川へ返す	文章 起草
9				山田良作(同室) より代数の質問	地藏縁日 遊歩		英書 唐宋八大家	日誌
10	就寝	就寝	井上要三郎来室	就寝	就床	就寝	就床	
11			就寝					
12								
1								

第13表 森田日誌 (明治13年9月) 寄宿舍在舎

時刻	9/12 (日)	9/13 (月)	9/14 (火)	9/15 (水)	9/16 (木)	9/17 (金)	9/18 (土)
5							
6	起床 雑事 習字	起床 雑事	出床 雑事	起床 雑事	起床 庶事	出床 雑事	出床 雑事 日々新聞
7		日々新聞	日々新聞	日々新聞	日々新聞		
8	日下部先生宅へ	目痛ノタメ横臥	英書ヲ読ム	窮理書ヲ読ム	読書	英書ヲ読ム	眠ル
9	日比谷練兵場 閲兵ヲ見ル	代数 授業欠席 予読ナキタメ	授業出席	授業出席 教師 来ラズ 窮理書ヲ読ム	米国史受講	授業	起床 日誌
10				窮理書講義ヲ聞ク	窮理書受講		
11	雑事	代数 出席	代数 出席	代数 出席	代数 出席	代数 出席	代数 出席
12	書簡 藤田孝誼へ 食事 運動場 (弓) 山本						
1	書簡 国元弟へ	食事 定規ノ清書	午餐 雑事	雑事	雑事	雑事	午餐 舎弟へ書簡ヲ 認ム
2		和田柔術場(撃剣) 堀	梅木室へ 和田柔術場(撃剣)	塾中徘徊シ遊ブ	撃剣 池田, 山岸	撃剣 池田	清浄

3	未了		帰室 英書ヲ読ム	読書	英書ヲ読ム	帰室 眠ル	
4		帰室					
4	大掃除 浴場へ	英書ヲ読ム				岡村来	習字
5		入湯	井上室へ	入湯 食事	雑事	入湯	
6	宵食	晚餐 雑事	晩食 井上室へ	散歩 井上,山岸 平井寓へ		夕食 雑事	夕食
7		遊ブ	出塾, 買物 神明前 三田, 今井	帰塾	散歩 帰室 休憩	遊ブ	出塾 書簡投函 入湯
8	定規ヲ書ク 仮眠 井上来	英書ヲ読ム	井上室へ 帰室 読書	読書	読書	帰室	帰室 山田, 小林
9			竹屋(ソバ)へ 帰塾 井上室へ	代数	代数 居眠リ	就寝	
10	漢字(習字)	帰室 読書 居眠リ	横臥	居眠リ			竹屋(ソバ)へ 山田・渡辺 大島・平賀
11	就寝	英書ヲ読ム	就寝	就寝	習字		
12		就寝			就寝		帰室 就寝
1							